想像が創造を具現化させる

アマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想像が創造を具現化させる

【Nコード】
N6951Y

【作者名】
アマ

【あらすじ】
空を飛べない、魔法が使えない。
そんな人間に「創造」という、魔法のような技術が使えるようになった。
人間の「想像」によって「創造」が生み出され、「創造」したものを「具現化」することができる。
物語の主人公、不動終夜は、この「具現化」ができない。
そんな終夜が、高校で新たな物語を創りだす！

第一話　憂鬱な実技試験（前書き）

「“そうぞう”を超えた先には」のリメイクです。前作のはネタバレ防止のため削除致しました。前作のとは内容がまるっきり違いますので、完全に忘れてください。

第一話　憂鬱な実技試験

人間はつまらない・・・・・・・
とある人間がふと思ったことだった。
なぜ人間は空を飛べない？なぜ人間は魔法を使えない？
これらは人間、誰もが一度は求めるものではないだろうか。
求めてはいてもとても叶うことではない、そう誰もが思っていたはずだ。
だが、そんな人間にも何か特出しているものがあるのではないか、とそんなことを考え出した。
そして、一つの答えに辿り着く。
それは「想像力」。
漫画、アニメ、ゲーム、小説、ドラマ・・・・・・・・・
どれも人間が無から考え出したものだ。
もともと魔法という概念は誰が考えた？人が空を飛ぶという想像を誰がした？
どれも人間の想像から生まれたものだ。
天狗や河童等の空想上の生き物は多々あるが、その中で明らかにされている存在、『仙人』。
遙か昔、仙人は無から物を生み出す力を有していたと言われている。
これは頭に浮かべた物を具現化させたのではないだろうか。
この仕組みさえ分かれば仙人の子孫と言われているすべての人間にも扱うことができるのではないだろうかと考えた。
そしてある日、それは現実となった。
無から有を作り出す能力。
いくつか制約はあったが、『想像』を『創造』することを可能にした。
だが、これは決して超能力や魔法ではない。
人間が持って生まれた能力だ。

人間はつまらないものではなかった。
素晴らしい能力を持っていたのだ。
ただ今までその使い方を知らなかっただけ。
この日から、新たな物語の幕開けとなる。
これはファンタジーが現実となった『想像』を『創造』する物語・・・・・

◇◇◇◇◇

「はあ～憂鬱だ」
この少年の名前は不動終夜（ふどうしゅうや）。
ワックスで髪を整えた、どちらかというと幼い顔立ちをしている。
目つきも温厚な目をしていて、人当たりがよさそうだ。
「いい加減覚悟を決めろよ」
「湊はまだいいよ。ちゃんとできるんだから。それに別に覚悟を決めてないわけじゃない」
湊と呼ばれるウェーブのかかった茶色のボブヘアの男がやれやれと肩をすくめる。
「まあ確かに終夜ほど『創造』の『具現化』ができないのも珍しいけどさ」
創造・・・・・・想像によって無から造りだすことの過程を指す。中にはすでに在るものを別の形につくり変えていく行為という意味でも用いられる。「創造」によってものを生み出すことを「具現化」という。現代の人間のほぼ全員にこの創造という能力が備わってい

るため、創造ができないということは昔で言う、勉強ができないということと同義となる。要するに社会的にも虐げられてしまう。
高校ともなると創造ができなければ入学することは難しいのだが、終夜は筆記テストだけで名門とも言われる鷹左右（たかそう）学園に入ることができた。
創造が重要である現代の世の中で、筆記だけで受かるとなればほぼ満点でなければならない。終夜はそれでもまったく創造ができない自分が、この名門とも呼ばれる鷹左右学園に入れたことに疑問を覚えながらも当時は喜んだ。

「だけど名門だからこそ当然実技が重要視されるのは分かっていたはずなんだけどなぁ」

要するに朝也はこの学園の落ちこぼれだった。運よく受かっただけで、本来この学園にふさわしくない人間だと。
それが理由で入学したてとはいえ、朝也にはこの学園で友人と呼べる存在がここにいる月城湊（つきしろみなと）しかいなかった。

「お前が具現化できないなんて皆知ってるんだから、今さら怖気づくことはないんじゃないか」
「他人事だなぁ」
「そりゃあ俺はできるからな」
「はぁ・・・」
終夜が再びため息をついたところに放送が流れた。
“これから学年ごとに合同の実技試験を行います。Ａクラス以外の

一年生は校庭に集まるように”

昨日が入学式だった、入学したての一年生には生徒の実力を測るために実技試験が行われる。

ちなみにAクラスだけ校庭に集まらないのは、彼らが「魔法使い（ウィザード）」と呼ばれているからだ。

魔法使いのようになんでも出せるほど創造に長けている生徒に、「魔法使い（ウィザード）」という称号が与えられる。

この「魔法使い（ウィザード）」を与えられた生徒は一学年に三人しかおらず、Aクラスに集められる。

魔法使い級の生徒はその学園にとって、戦力的にも非常に大きく重要な存在であるため、一般の生徒の前でむやみに創造を見せないようにしている。

といっても、そう思っているのは教師だけであり、別段行動の制限はされていない。

「ほらさっさと行くぞ」

「りょーかい」

生徒たちにとって大勢の前での実技試験というのは、自分の創造自慢の場と言っても間違いではない。

終夜たちが廊下に出ると、生き生きとした表情の生徒が多く見られた。

そんな中で一人憂鬱そうな顔をしていれば、これまた目立つ。

「お、あそこに暗いやつがいるぞ」

「ほんとだ。楽しい楽しい実技の時間なのになんで暗いんだろうな」

「おいおいお前ら、そういうこと言うのはやめとけって」

湊以外で味方してくれる人が、と一瞬喜んだのも束の間、次の言葉でその喜びも一瞬にして地に落とされる。

「何もできないからだろ。残酷なこと言うなよ」

「そりゃそうだ。すまんなあ、残酷なこと言って」

「あははは」

「お前らいい加減に・・・」

「いいんだよ湊。さっさといくぞ」

慣れているのでもう気にしない。
こんなことはなにも高校に入ってからではないのだ。
中学の時にはすでに孤立していた。
人当たりのよさそうな顔をしているため、時々女の子から声はかけられていたのだが、入学したての終夜はものすごく暗かった。
一年も経てばさすがに普通に戻ったが、時すでに遅し。気づけば自分の周りには湊しかいなかった。
湊とは中学の時からの付き合いなのだが、湊だけは終夜と普通に接してくれていた。

「なあ、何回も確認するようで悪いんだけど、本当にお前の媒体はそれで正しいのか?」

媒体とは、創造するときの必須アイテム。現実世界で自分が一番大切にしているものを媒体に選ぶ。現実の中で自分が大切にしている

ものを想像の世界に持ち込むことで創造をより正確にできるようにするためだ。
媒体がなくても創造はできるが、精度が大きく低下し、非効率になる。ウィザード級と呼ばれる人でさえ満足に扱うことはできなくなるほどだ。
だが、自分が一番大切にしているという性質上、なかなか見つからない人や媒体が変わる人がいる。本当に大切なものなら媒体を変えることは可能だが、そういう人はたいてい創造がうまくならない傾向にある。

「お前のそのペンダント。誰からもらったのか覚えてないんだろ？」

「まあ、ね。だけどこれ以外に特別なものが思い当たらないからな」

終夜が服の中からペンダントを取り出す。中が開く形式になっているのだが、中には何も入っていない。気づいたときには、終夜はこのペンダントを身に着けていた。

「湊は媒体がそれだって、どうやって分かったんだ？」

湊の媒体は音楽で指揮者が使う銀色の指揮棒だ。

「俺はこれを物心ついたときから持たされてきたからな。俺もこれ以外考え付かなかった」

「特別なものって言ったらそんなもんだよなあ」

特別にもいろいろな意味がある。大切な人からの贈り物、思い出深い物、自分の成果、証明等・・・
終夜のペンダントはこのどれにも属さない。実際は属しているかも

しれなくても記憶になければそれは属していないのと同義だ。
だから創造ができなくても仕方がない・・・・・・終夜はそう思っていた。

「次の生徒」

◇◇◇◇◇

合同と言っても、クラスごとに分かれてそれぞれ試験が行われる。
それでもすべてオープンな状態なため、試験中の様子が誰でも確認できるようになっているものだから終夜は困っていた。
創造ができないことをバカにされるのが慣れていると言っても、ほぼ全クラスの生徒の前でやるものだから気が進まない。

「覚悟決めたか？」

「覚悟もなにも逃げられないだろ」

「とりあえずどんなにショボくても成功させろ。ショボイだけなら他にもいるだろ」

湊の言うことには一理あるが、名門とも言われるこの学院内での創造がショボイのレベルはたかが知れている。

「ま、バカにされる内容が『できない』から『ショボイ』に変わるだけだけどな」

そう言う終夜の口調はふざけているだけ。終夜は創造ができないということをネガティブに考えているわけではない。これが自分の一部だと受け入れている。

ただそれでも人前でやるのとはまた別の話になる。

「次！」

「ほら、次は湊の番だぞ」

「んじゃ、行ってくる」

湊が指揮棒片手に前に出る。他の人は一回一呼吸おいて創造を行っていたが、湊はまるで一呼吸おくかのように慣れた感じで創造を行った。

今回の課題は自分の属性の玉を出して飛ばすこと。五大元素属性というのは火、水、風、雷、土の五つの属性のことだ。五大元素と呼ばれる火、水、風、雷、土で、火を使える人は水が使いにくい。風を使える人は雷が使いにくいという決まりがある。これは魔法使い級の人間も例外ではない。

他に光と闇という属性があるのだが、使える人が本当にいるのかどうか分からない不確定な属性だと言われている。

「ほいっ」

湊が出したのは直径３０ｃｍほどの風玉だった。大きさとしては他の人と比べたらたいして大きくない。他の人は派手さにこだわってやたらと大きな玉を出していた。

だが終夜には分かる。湊の風玉は他の人よりかなり密度が濃いことに。あの風玉を学院に放ったら、簡単に貫通することだろう。

湊は出した風玉を真上に放って破裂させた。そのまま、湊は終夜の元に戻る。

「ただいま」

「お疲れさん。にしてももっと派手にできただろうに相変わらずだな」

湊の実力ならあの質量でももっと大きくできる。いくら密度を濃くしたところで試験官が気付かなければ意味がない。

「お前こそその洞察力はたいしたもんだよ。と言っても俺と同じく他者には分からないことだけどな」

「まったくだ」

２人が話している間にも次々と試験は進んでいく。

「次！」

次の生徒は二人同時だった。

「今度は二人同時？どういうことだ」

２人は目を瞑って手を繋ぐ。
少しして直径１ｍほどの水玉が具現化された。

「あれってどういうことだ？」

「見たところ手には何も持っていない。何かを身に着けているふうでもないし、にわかには信じられないけど、お互いが媒体なんじゃないか？」

「確かにそうかもな。実は目立たないものが媒体って可能性もある

けど、２人で出る理由の説明にはならないからな」

「それより、少し様子がおかしくないか？」

２人が出した水玉が誰もが見て分かるほど不安定になり始めた。

「長髪の子が苦しそうにしているな」

こちらも誰もが分かるほど明らかに体調に異変が起きていた。
長髪の子の体調に呼応しているかのように、水玉がグニャグニャになっている。
やがて長髪の子が膝から崩れ落ちた。それに続いて水玉を崩れ落ちる。

「大丈夫か？」

気を失うほどではなかったみたいで、相方の肩を借りてフラフラながらも元の位置に戻っていく。

「人の心配している余裕はお前にはないはずだぞ」

「ん？」

「次、お前だろ」

湊の言葉で前を見ると、試験官・・・・・・以外にもクラスの大半が終夜を睨んでいた。

「・・・行ってくる」

終夜が前に出ると、終夜のクラスの場が途端に静まった。まるで皆で示し合わせていたかのようだった。よく見ると何人かニヤニヤしている。

「ふう」

終夜はペンダントを強く握りしめる。

創造をするには、まず自分の想像の世界を展開しなければならない。このフィールドのことをIF（Imagination field）と言う。もともとIF、もしもの世界が現実になればいいなということでの名称らしい。

自分を中心に他者には見えないフィールドを展開する。この中は自分の脳と同じで、強く想像したことをこのフィールド内に具現化させる。

そして火の玉等を具現化してフィールド外に出しても消えることはない。フィールド内でしか具現化はできないが、一度具現化したらそれは現実に存在する「もの」となるからだ。

終夜はフィールドを展開するが直径2？ほどの小さな火の玉しか出せなかった。しかも出してすぐにポンッと間抜けな音をたてて消滅した。

「あはははは っ」

何人かの生徒が一斉に笑い出す。終夜はそれらを無視して湊の元へ戻った。

「ちゃんとできたじゃないか」

「そりゃどうも」

誤解されがちだが、湊は決して終夜をバカにしているわけではない。
創造ができるできないで人を区別しないだけだ。
確かに昔は勉強ができないからといって孤立していたわけではない。
それなのになぜ自分には友人ができないのか終夜は不思議だった。

「これで試験は終了だ。各自教室に戻るように」

未だに笑いが絶えない中、終夜と湊も教室に向かう。途中でからかってくる生徒が現れたが、もちろん終夜は軽くスルーした。

「そういえばさっきの生徒はどうなっただろうか？」

「さっき普通にみんなと一緒に戻ってるところを見たぞ」

湊の疑問に終夜が答える。

「よく見てるなあ」

2人が教室に入ると、すぐにいつもの生徒が絡んできた。

「お、できそこないが帰ってきたぞ」

「あの間抜けな音はなんだ？やろうと思ってできる音じゃねえな」

「それってある意味すごいってことじゃね」

「それもそうだな。よかったじゃねえか、お前にもすごいことができて」

「（こいつらも飽きないなあ）」

「そういうのやめてください」

喧噪の中、一人の女の子の声が響く。
それは先ほど体調を崩した長髪の女生徒だった。

「そうやってバカにするのってよくないと思います。私だって不安定な創造で体調崩しちゃったですし・・・・・・バカにするなら私にもしてください」

皆呆気にとられる。
一見おとなしそうな女の子が、真剣に今日会ったばかりの男子生徒を庇う姿に圧倒されていた。

「いや、俺は別にかまわないから・・・・・・」

「よくありませんっ」

庇ってくれるのは嬉しい。
だけど、どこか気恥ずかしいものがあった、が・・・・・・

一蹴される。

「・・・・・・」

「まあ終夜、ここは素直に喜べ」

嬉しいことは嬉しかったのだが、妙な気持ちだった。

「ちっ、なんだよ」

「いい子ぶりやがって」

男たちは悪態をつきながら教室を出ていく。

教室内は再び静寂に満ちた。

「あ、あのっ」

最初に口を開いたのは女生徒だった。

「ご迷惑・・・でしたか？でも同情とかじゃありませんっ。私も同じですから・・・・・・」

終夜は最初からこの女生徒が同情で庇ったなどと思ってはいない。ただ、突然すぎて何を口にしたらいいか迷っていただけだった。

「そんなこと思ってないよ。むしろお礼を言いたいぐらいだ」

「よかった・・・・・・あ、私は小鳥遊希（たかなしめぐみ）です」

「ボクは小鳥遊望（たかなしのぞみ）だよ。ボクたちは見ての通り双子だから」

ずっと相方のそばで様子を見ていた少しボサッとした短髪で活発そうな女生徒も自己紹介をする。特徴と言えば着ている服の袖が少し長いところだろうか。

見ての通り、と言っているけど誰が見ても2人が似ているとは思え

ない。

「あ、ああ。俺は不動終夜。こいつは・・・」

「月城湊だ」

「よろしくね。あ、ボクたちのことは名前で呼んでね。同じ苗字ですから」

さん付けにしようと思ったのだが、呼び捨てでかまわないと言ってくれたため、呼び捨てにすることに。

同年代の女の子を呼び捨てにすることが初めてな終夜は、内心少しドキドキだった。

「実は・・・・・・私たちはお互いが媒体なんです」

言いにくそうに告白する希に終夜はやっぱりとつぶやく。

「気づいていたんですか？」

終夜としてはあれを見てその可能性を考えないほうがおかしいと思っていたのだが、希は気づいたことが意外だったようだ。

「今まで私たちがお互いが媒体だって言っても、誰も信じてくれなかったんです。精神的にお互いがいなきゃ駄目な性格なんだろうって」

人間が媒体だって話は聞いたことがない。そう思う人が多くても不思議ではなかった。

「でも、皆がそう思う理由は私のせいなんですけど・・・」

先ほどの試験の時、創造をした途端希の体調が悪くなったところを思い出す。

媒体が合わなくて体調が悪くなるという話は聞いたことがないが、失敗する理由が媒体にあるというのは別段おかしくない。

そんなことを考えながらも、暗い雰囲気が苦手な朝也は話題を変えることにする。

「それよりそろそろ帰らない？HR（ホームルーム）がないみたいだから、一緒に帰ろう」

終夜にとって女の子と一緒に下校するということが初めてだったから、勇気のいるセリフだったのだが。

「はい」

終夜が気を遣ってくれたことに気づいた希は、笑顔で返事をしたくれた。

第一話　憂鬱な実技試験（後書き）

終夜の性格の違い等で若干違和感があるかもしれませんが、これからもよろしくお願い致します。

第二話　出会い

「ここどこだよ・・・」

終夜は一人、暗い洞窟の中を歩いていた。

上がどこまで続いているのか分からないほど暗く、自分の足元すら見えない状況。

創造で明るく照らすことなんてできるわけもなく、間隔と手探りで進んでいる。

「知らない洞窟で道に迷うとかヤバいな、この状況」

こんなところを彷徨う羽目になったのには、もちろん理由がある。

それは終夜の休日の日課、具現化の練習中に起きた出来事だった。

「はあ、はあ」

具現化の修行の時、いつも終夜は自分の限界まで創造をしていた。

やっていることは、火、水、雷、風、土の属性玉を一通り具現化するだけ。

しかし、どれをやっても上手くいかないのはいつものことだ。

それでもあきらめずにするこの訓練も、全くの無駄というわけではない。

もともと終夜は全く具現化ができなかった。

しかし、先日の試験で証明したように、『全くできない』から『少しできる』へと進歩した。

ここに至るまで一年かかったが、練習すれば進歩できるというのが

証明できたからこそ今もこうして続けていられるのだ。

「ラスト」

自分の限界が訪れたと思ったときに、最後の一回と無理やり創造をする。

これはたまたま漫画で見た知識だったのだが、なんとなく上達している気がして毎日続けていた。

ちなみに内容は『己の限界に達した時からが修行の始まり』といった暑苦しい内容だったのだが、中学二年であった終夜には強く心に響いた。

そのため、これもいつものことだったのだが、事件はこの時起きた。

最後に火の玉を出そうと集中し始めたとき、耳がマヒするほどの大きな音が鳴った。

学校でマイクを使用しているときにたまに鳴るあれだ。それがまるで終夜の耳元で鳴っているかのように響いたのだ。

限界ギリギリだった終夜は、この音で集中力を欠いてしまった結果、創造した火の玉を暴発させてしまったのだ。

とっさに火の玉を自分から切り離して後ろに下がったから直撃はしなかったものの、一度具現化した火の玉は消えずに地面に当たって大爆発を起こした。

「うおっ」

地面が薄かったのからか大きな穴をあけてしまい、近くにいた終夜はその穴に落ちてしまった。

「ちょっ、深っ、これマジ死ぬって」

意外なほど深かった穴にどんどん落ちていく。

終夜の頭には着地した時、自分がグロテスクな状態になって地面に突っ伏している光景が浮かんできた。
慌てて壁に手をつけて勢いを殺そうと試みる。
爪が削れ、皮膚を傷つけながらも勢いはほんのわずかしか落ちない。
やがて地面が見えてきて、慌てて風玉を創造した。
自分の未熟さと疲れで、かなり小さな風玉だったが、質がよかったのか死なずに着地することができた。

「・・・・・」

無我夢中で創造した結果、今までに類を見ないほど質がいい創造ができて心臓がバクバクだ。
喜びの興奮より死に直面した動悸なのかもしれないが・・・

「こりゃあ上に登るのは勘弁だな」

壁がゴツゴツとしているから頑張れば登れなくもなさそうだけど、しくじれば今度こそグロテスク確実だ。
疲れが限界に達している終夜にはきつい作業になる。
終夜はすぐにその案を切り捨て、道が続いているのを確認して先に進むことにした。
先ほどと違い、地上の光が届かないので足元が見えないほど暗い。
なんとか自分の感覚を頼りに、壁に手をつきながらゆっくりと進む。

「コウモリとか出ないでくれよ」

独り言でもしていないとやっていられない状況。
別に終夜は暗いのが怖いわけではない。
幽霊が出そうとかで恐れているのではなく、本当にコウモリや蛇なんかが出てくるかもしれないということに恐怖していた。

「光・・・・・・」

どれだけ歩いたか分からない。
終夜の体感では一時間は歩いていた気分だった。
やがて目の前に光が差し込み、まず自分の足元と後ろを確認して変なものがついてきていないか確認した。

「よしっ」

そして光の元へ素早く走り出す。
光の正体は太陽・・・ではなく、ネオンの光だった。
そして中央には鎖によって磔にされた女の子が眠っていた。
周りには何もない。
女の子の周りに、四つのネオンが光る柱があるだけだった。
幼い顔立ちをした背の低い女の子。
磔の状態とのギャップに終夜が感じたのは当惑や興奮ではなく、疑問だった。
なぜ磔にされているのか、という疑問ももちろんあったが、こんな地下に長い間磔にされていてなぜ衰弱していないのか。
鎖と柱には大量の埃が溜まっていた。
終夜は女の子に近づき、呼吸と脈を確認したが、どちらも止まっていた。
しかし放っておけるわけもなく、どうやって鎖を外そうかと朝也は思案する。
試しにどのくらい鎖を動かせるかと鎖に触れてみた・・・・・瞬間に鎖が消滅した。
終夜が触れたところからジワジワと消滅していく。

「おっと」

支えを失った女の子が崩れ落ちるのを終夜が受け止めた。

「って、裸ぁ！？」

鎖で隠れていたから露出が多いなぐらいにしか思っていなかったが、受け止めた少女は何も身に着けてはいなかった。

慌てて終夜は自分が着ていたパーカーを脱いで少女にかける。

すべすべで柔らかい肌。幼い顔立ちをしているが、きちんと女の子の身体をしていた。

「これって死体・・・・・・なのかなあ」

仮死状態に取れなくもないが、それにしては保存が雑だ。

かといってこんなきれいな体を死体と呼ぶのも不自然な気がした。

「パチッ」

「うおおっ」

死体だと思っていた少女が、目の開く「パチッ」という擬態語を発しだした。

さり気なく脈を確認してみると、きちんと生存していることが確認できる。

終夜はそのままゆっくりと少女を下ろす。

「・・・いろいろ聞きたいことがあるけど、まずはここから出ないか？」

終夜は冷静だった・・・・・・わけではない。

鎖が消滅すると同時に、ネオンの光も徐々に消えてしまったので、再び何が出るか分からない恐怖に陥ったのだ。

「・・・うん」

答えながら少女は終夜の裾をちょこんと掴む。

「怖いの？」

「・・・・・・うん」

「俺も怖い」

お互いが感じている恐怖は違うものの、少し情けなかったかと終夜は後悔する。でも怖いものは怖い。
終夜は少女が寒そうにしている様子を見て、先へ進むことを急いだ。決して怖かったからではない。
暗い道を歩いている間、気を紛らわせるために少女に話しかけたが、少女が口を開く気配はない。
怖くてそれどころではないのだろうと終夜は思い、会話を諦める。
道がだんだんと上を向き、終夜が落ちた分を登っている感じだ。
そして道が険しくなるにつれて少女の歩くペースが悪くなっていく。

「ほら」

終夜は腰を下ろして背中を開けた。

「・・・・・・？」

「足つらいだろ？おぶってやるから遠慮せずに乗りな」

はだしだった少女に提案。
少女は一瞬考える素振りを見せたが、やがて無言で終夜の背中に体を預けた。

「(軽っ)」

人間の体はこんなにも軽いのかと疑うほどにその少女は軽かった。

「(そして柔らかっ)」

少女は衣服をまったく身に着けていない。終夜の上着を肩からかけているだけだ。
少女の肌と朝也の手がダイレクトに触れ、僅かながらの胸もほぼダイレクトに背中に伝わっている。
先ほども少し触ったがあの時とは違い、人間の体温を強く感じる。

「・・・・・?」

「なんでもないですよ?」

疑問に疑問で返してさらに疑問に思う少女を無視して終夜は歩を早めた。
少女は恐怖で終夜にしっかりと抱きついているため、終夜のドキドキは止まらない。

「(これが吊り橋効果ってやつか)」

終夜はテンパってわけの分からない、間違ったことを考えてしまう。
単に女の子に対しての免疫が極端にないだけだ。

「・・・光」

少女のつぶやきに終夜は正気に戻って、光に向かって一目散に走りだした。
今は暗いところから抜け出したいという気持ちを忘れて、少女を早く下ろしたいという気持ちでいっぱいだった。

「・・・・・眩しい」

今度は太陽の光だった。
女の子は眩しさで終夜の背中に顔を押し付ける。
この子にとって太陽の光は何年ぶりだったのだろうと考えたところで、気づいた。

「(この子どうしよう・・・・・・)」

洞窟を抜けだしたからといってこのままにしておくわけにはいかない。
長い間洞窟の中に縛られたぐらいだから家や家族なんかがあるわけがない。
だからといって事情を説明して保護してもらうことも難しいだろう。

「一緒に来るか?」

結局この答えに辿り着いた。
見ず知らずの女の子を家に連れ込む。
普通はありえないが、いろいろとパニックになっていた終夜にはこれ以外考え付かなかった。

「（コクリ）」

背中でうなずく気配を感じて、そのままの状態で家に送ることにした。

自分の背中で少しでも女の子の裸体を隠すためだ。

「（でもこれって端から見たら犯罪に見えるような気がする）」

家に着くころには冷静になっていた終夜が、女の子を家に入れるときにやっと気づいたことだった。

◇◇◇◇◇

「とりあえず俺のTシャツとジーパン・・・・・・はベルトをつけても落ちるからそれで我慢してくれ」

少女はコクリとうなずく。

こうしてよく見てみると幼いながらも、すごく整った顔立ちをしていた。

幼さが強調されてかわいらしいという形容詞がよく似合う。

先ほどの柔らかい肌を思い出した終夜は、慌ててそれを振り払って本題に進む。

「俺は不動終夜。君は？」

完全に冷静に戻った終夜はまず服を与えて自己紹介を始める。

終夜は過去に振り返ることはしない。

どんな結果であれ、それを受け止めて次に最善の方法を考えることにしていた。

「・・・綾音は綾音」

ちょこんと座っている綾音と名乗る女の子がおどおどしながらも自己紹介をした。

「んじゃ綾音。綾音はなんであそこにいたのか分かるか？」

「（フルフル）」

首を横に振る綾音。

「創造って知ってるか？何でもいいから創造してみて」

記憶消失の時は創造ができるかどうかをまず確認する。
創造ができれば生活にはまず困らない。
だが創造ができないほどとなると、かなりの重症ということになる。

「ん～」

目を瞑って一生懸命に唸りだす。

「それ、たぶん想像」

「ん？」

「はぁ～」

お約束のボケに軽くため息をつく。
今のご時世、創造ができないどころか知らないなんてのはかなり厳しい。

しかし、それ以上に終夜は疑問だった。

「綾音はいったいいつからあそこにいたんだ？」

創造が一般に広まったのは約１００年前。それ以前の人間に創造は使えない。

実際にまだ１００を超える人間が少数ながらも存在しているため、創造が使えない人間というのがしっかりと確認されている。

あの保存の仕方で仮死状態だったとは考えられないし、綾音が１００を過ぎているとも考えにくい。

記憶消失なら創造ができなくても不思議ではないが、見つけたときの状況から考えて、単なる記憶喪失で片付けられる問題ではないと終夜は考えた。

「（固定・・・か？）」

土属性の固定を使えば、生きたまま、そのままにしておくことが可能だ。

もっとも、理論的には可能だが、いろいろな問題により現実にそんなことはありえない。

「あ・・・」

突然綾音が何かを思い出したように声を出す。

「何？」

「綾音はロボットなの」

「・・・・・」

他の可能性と比べたらロボットというのが一番有力な気がする。

「まあロボットでいいや。じゃあご飯はいらない？」

「ご飯は・・・・・ほしい」

グゥ～っとお腹の鳴る音が響く。

「とりあえず昼にしようか」

ツッコみはしない。

何も知らない綾音にこれ以上聞くことを諦めただけだった。

「うん」

綾音はパアッと明るい顔になってうなずいた。

「じゃあちょっと待っててくれ」

両親共に常に外出しているので終夜は一人暮らしをしているため、料理はお手の物だ。

「早く食べたいだろうから簡単に野菜炒めでいいな」

「あ・・・・・」

綾音が何か言いたそうにするが、火の音で終夜の耳には届かない。

「ふんふんふん」

ノリノリで料理をする終夜の傍らで落ち込んでいる綾音。
その意味を終夜は食事中に知ることになった。

「・・・人参とピーマン・・・嫌い」

「・・・ロボット・・・だよね？」

「・・・人参とピーマン・・・嫌い」

そろそろと自分の人参とピーマンを終夜のお皿にうつす。

「好き嫌いはいけません」

「あう」

「ほら、キャベツと一緒に食べれば味なんて気にならないから」

「あむ・・・・・・う〜」

「よく食べたな」

よしよしと頭を撫でると綾音は嬉しそうにしてもう一口パクッと食べた。

「う〜」

「はは」

苦い顔をしながら頑張って食べるたびに終夜は綾音の頭を撫でる。

その姿はまるで、妹に対する優しい兄のようだった。

「く〜」

食事を終えて終夜が食器を洗っている間に、綾音は静かな寝息を立てて寝てしまった。

「さて、綾音はもう家に置いとくしか選択肢はないな。肝心の服の・・特に下着の調達なんだが・・・・・」

終夜の隣で寝ている綾音をちらっと見る。
綾音よりはるかに大きなTシャツを着ているためギリギリ下まで隠れてはいるが、きわどかった。
さあどうしようかと考えたところで、終夜に名案が浮ぶ。

「小学校以来湊以外で初めて友達ができたんだ。こういう時相談しないとな」

終夜は携帯を取り出して希の番号を表示させる。
初めて会った日の帰りにメアドを交換していたのだ。
もっとも終夜が積極的に申し出たのではなく、湊が気を遣ってくれたのだが。
女の子のことは女の子に聞いたほうがいいに決まっているとさっそく電話を鳴らした。

「（いやまて、なんて聞けばいいんだ？）」

鳴らし始めたところで極めて繊細だろう問題に気づく。

『はい小鳥遊ですが、不動さん？』

「（なんて言うべきか・・・・・・）」

『不動さん？』

着信の時の画面で終夜だと分かっているのだろうが、終夜の返事がないため自信なさげな声だ。
そもそもかかってきた電話に出て反応がなければ訝しくなるのが普通だ。
そのことに気づいた終夜は慌てて口を開いた。

「あ、ああ、すまない。ちょっと相談があるんだけど・・・」

『はい。私でよければ相談に乗りますよ？何でも言ってください』

「ええと・・・・・・」

朝也は必死に考えた。
しかし心配そうに聞く希に急かされるように、思っていたことをそのまま口に出してしまった。

「女性用の下着がほしいんだけど・・・・・買いづらいんだよね」

『え、ええと・・・・・・』

「（アウトー！！）」

何でも言ってくださいと言ってくれたが、これは希が予想していた

内容を遙かに超えていたことだろう。
希ができる範囲を超えている。
下手すれば希の下着をくれと言っているようなものだった。
だが希はどうオブラートに包んで言うべきか迷っているのか、言葉を探していた。
明らかに不審な終夜に対して、思ったことをそのまま言葉に出さないあたり、希の性格の良さがうかがえる。

「・・・すまない。事情をきちんとさせてくれる時間を与えてくれればうれしい」

自分があまりにも恐ろしいことを言ったことに気づいて冷静になる。
今鏡で自分の顔を見たら絶対に真っ青だよな、と思うほど血の気が引いていた。

『は、はい』

別に隠すことではないので綾音のことを出会いから含めてすべて説明する。
次第に安心していく希の声を聞いて、終夜も心の底から安堵した。

『そういうことですか。安心しました』

本当に安心しているのだろう。
高校最初の友人が、女性用の下着を求める変態だというのは避けたいところだ。

「（希が理解ある人でよかったあ）」

相談相手を望にしていたら大変だっただろうと、終夜は自分の判断

を喜んだ。
『それなら私が適当に買ってきて不動さんの家に持っていきますよ。綾音ちゃんを連れて買い物はできないようですから』
「本当か！なんだか悪い気がするけど他に方法がないし頼んでもいいかな？」
『遠慮しないでください。では簡単にサイズを測ってもらえますか？』
また無茶難題を、と思ったが、自分で買うことを考えたら安いものだと思い改める。
「・・・分かった。たぶんちょっと時間かかると思うからまたかけなおす」
「分かりました。急がなくてかまいませんから」
希の気遣いに、本当にいい友達だと感動しながら電話を切る。
未だにかわいい寝息を立てている綾音を見ながらこれからのことを考えて、終夜は先ほどの自分の決断を少し後悔した。

第二話　出会い（後書き）

前作を見ていただいていた方のみに報告です。名前を綾香から綾音に変更しました。理由は一人称が綾香より綾音のほうがしっくりきたからです。

第三話　綾音のサイズ

終夜の目の前には静かな寝息を立てている綾音の姿がある。
これからのことを考えながら、起こしたほうがいいのかどうか迷っていた。
だが、綾音はいわば無垢なる子ども。
これから終夜が綾音に対してすることを想像すると、間違った知識を与えかねなかった。

「しょうがない。こっそり・・・いやこれだとやましいことをするみたいだな。さっさと済ましてしまおう」

希に下着を含めた衣類を購入してもらうのに、サイズを測る必要がある。
終夜は女性が服を購入するとき、どの程度サイズを気にするのか分からない。
終夜自身は服もパンツも袖と裾の長さだけ合えばよかっただけだし、下着なんてＳ・Ｍ・Ｌぐらいしか考えたことがない。
希にわざわざ頼むのだから中途半端なことはしたくなかったため、希が買う時に困らないようにできる限りのことは調べるつもりだったのだが・・・

「まずは腕と足の長さだな」

本来なら試着して買うものなので、今回はこれぐらいはしないとならない。
終夜はメジャーとメモを手に寝ている綾音に近づいた。
「改めて近くで見ても、やっぱり小さいなぁ」

冷静に綾音を観察するのは今が初めてだ。
最初から小さい子だとは分かっていたのだが、細くて華奢だった。

「――よし。あ、靴も必要だから足のサイズだな」

足囲と足長を測る。
終夜が足に触れたとき、綾音が少し身じろぎした。
起こしてしまったか、と一瞬不安になるが、むにゃむにゃしただけで眠り続けてくれた。

「そういえば赤ちゃんはほっぺに刺激がくると、その方向に口を近づけるというのを聞いたことがあるな」

綾音の寝ている姿が赤ちゃんの姿とかぶったため、終夜は興味本位に綾音の頬をつっついてみる。

「んっ」

綾音は少し身じろぎしただけ。
終夜はその反応がおもしろくて何度も続ける。

「んんっ・・・・・・・・・あむっ」

数回では赤ちゃんのように口を近づけなかった綾音だったが、何回も続けているうちに、いきなり終夜の指を咥えてしまった。
歯ごたえが気に入ったのか、そのまま指を甘噛みする。
終夜は綾音の口の中の温かさに動揺しつつも、慌てて指を引き抜いた。

「赤ちゃんみたいだからこそ困りものだな」

様子が赤ん坊に似てても、実際見た目は終夜と年がそんなに離れていない。

「それより次が最後だな。これが難関なんだが」

いくら小さいとはいえ、綾音は正真正銘女の子だ。ロボットかもしれなくても女の子には違いない。

「どう見てもBはないな。AとAAの違いがよく分からないから一応きちんと調べないとだめだよなあ」

女の子にブラは必須だ。
たとえわずかでも膨らみがある以上、きちんとつけていないと将来型崩れ（型崩れするほど成長するかはともかく）する可能性があるし、そもそも乳首は胸の大きさに関係ない。

「確かアンダーとトップの差で決まるんだっけか」

終夜は昔、カップの決め方は揉み心地で決めるものだと思っていた。漫画等でブラを買いに来たお姉さんが、店員に胸を揉まれている（実際には寄せてたりしていて、決して変な意味ではないのだが）のを見て、実際に触ることが前提だと思っていた。

「昔の知識のままだったら大変なことになってたな」

終夜は起こさないように綾音の体を起こして自分の体にもたれさせる。
服の上からでもいいのだろうかと一瞬思ったが、これを脱がしたら

スッポンポンだったと思い出してそのまま測ることにした。

「ん、んっ」

先ほど頬を突っついたときよりも悩ましい声をあげる綾音。
敏感な部分が擦れているのだからこの反応は仕方ない。

「端から見たら完全にアウトだな。それ以前に俺もアウトだ」

どのくらいきつく締めて測ればいいのだろうと四苦八苦していると、
ふと違和感が。

「・・・・・・」

綾音の目が開いていた。
目を開きながら寝ているのではないとしたら、起きているのだろう。
その目は微妙に寝ぼけていたが、目覚めているのには変わりない。

「・・・おはよう」

それは悩んだ末に終夜が選んだ言葉だった。

「ん、おはよう・・・・・・なにしてるの？」

至極もっともな疑問である。

「あ、綾音も女の子なんだなあ」

意味が分からない。
それに対して綾音の答えは。

「違う、綾音はロボット」

「そ、そうだったな」

どうやら綾音にとって、自分がロボットというのは重要らしい。
そのまま微妙な空気の中、なんとか終夜は綾音のアンダーとトップを測り終えた。
綾音は微妙に寝ぼけていたのか、悩ましい声をあげるだけで、特に終夜に問いただすことはしなかった。

「・・・・・ギリギリだな」

「なにが？」

「いや、なんでもない」

綾音の名誉のためにここは黙っておこうと終夜ははぐらかす。
もっとも、この無垢な瞳の持ち主にその必要はなかったのかもしれない。

◇◇◇◇◇

「ああ、よろしく。じゃあまた後で」

『はい』

なんとかすべて測り終えた終夜は希に自分の成果を告げて電話を切る。
難関を突破できて一安心する。

「とりあえず掃除しとこう」

頻繁に掃除をしているから汚れていないはずだが、女の子を家に呼ぶということで少し神経質になる終夜は、掃除機を取り出してスイッチを入れる。

ブオオオン

「それはなに？」

綾音は物珍しそうな顔で掃除機を指さす。

「これは掃除機って言って、床をきれいにするための道具だよ」

終夜は、綾音が本当に何も知らないんだということを改めて実感しながら説明する。

「やってみるか？」

「うん」

「・・・・・」

綾音に掃除機を渡すと、綾音はさっそくボタンを押した。
だが、急に音がなって驚いたのか、掃除機を落としてしまう。

落とした掃除機を見下ろしたまま、綾音は拾わない。

「どうした？」

「・・・重ぃ」

終夜は綾音の体重がものすごく軽かったことを思い出しながら、わなわな震えている細腕を見て妙に納得してしまった。

「ＯＫ。無理は禁物だ」

綾音を隅に移動させて掃除を再開する。
一通り掃除をし終えた（窓ふき等も含めて）いいタイミングでチャイムが鳴る。

「はいはーい」

扉を開けると私服姿の希と望が立っていた。
片手には大きな買い物袋を持っている。

「ごめんなさい。望も行くってきかなくて」

「全然かまわないよ。さあ入って入って」

「おじゃまします」

「おじゃましまーす」

終夜は大きな買い物袋を希から受け取って、２人をリビングのある、二階に案内する。
希はカーディガンにロングスカートといったシンプルでおとなし目

の服装。
望は短いスカートにYシャツの上にカーディガンといった、ちょっとボーイッシュな感じだ。ただし制服と同じで袖が少し長い。
2人の雰囲気がそのまま服装に現れていた。

「綾音ちゃんこんにちは」

小鳥遊姉妹を警戒して終夜の後ろに隠れている綾音に、希は少し膝を落として同じ目線で挨拶をする。

「・・・こんにちは」

「私は小鳥遊希と言います。よろしくね」

「ボクは望だよ。よろしくー」

「・・・よろしく」

終夜の後ろに隠れながらも顔を出して挨拶を完了させる。

「じゃあさっそくいろいろとお洋服を買ってきたから着替えましょう」

「さあ不動君は外に出た出た」

男の終夜がこの場にいるわけにはいかない。
終夜の家の二階には、階段を昇ってすぐのところにリビングが眼に入る。
そのため廊下がないので、近くの部屋に入った。

『下着もいくつか買ってきたから好きなのを穿いてね』

『あ、それボクとお揃いだよ』

『とりあえず今日はこのお洋服を着てください』

『お姉ちゃんったら初めて男の人の家に行くからって、自分の服選びに時間がかかったよね』

『ちょっと望』

『ホントのことでしょ』

『あ、あれは今日の気温が微妙だったからどのくらい着込むべきか悩んでいただけです』

「・・・・・・なんか悪い気がしてきた」

男が同じ部屋にいないというだけでなんという乙女ワールド。聞き耳を立てていたつもりではないけど、同じ部屋にいないというのに終夜は居たたまれない気分だった。この場からもう少し離れるべきかと悩んでいたところに、目の前の扉がカチャリと音を立てて開いた。

「・・・終夜・・・・・・」

綾音が顔だけを出して終夜を呼ぶ。入ってもいいという意味なのだろう。

「やっと終わったか」

「・・・・・？」

「なんでもないよ」

終夜は部屋に入って改めて綾音を見る。

綾音袖にフリルがついたピンクのかわいらしいワンピースを着ていた。

「パジャマとかもついでに買ってきました」

やけに大きな紙袋だなと思っていたら生活に必要な服を一通り買ってきてくれたみたいだった。

「それより綾音ちゃんの恰好見て不動君は何か感想ないの？」

「ん？ああ、希はセンスあるな」

「あ、ありがとうございます」

「・・・そっち？」

望は何か言いたそうにして諦める。

終夜は希にお金を渡して再度お礼を言った。

「気にしないでください。そろそろ私たちはお暇しますね」

「ろくにお礼もできなくてごめんね」

「もう、そういうことは言わないの。こういうのはお互い様でしょ」

「（なんていい子なんだ）」

終夜は心の中で激しく感動しながら玄関まで二人を見送る。

「今日はいろいろとありがとう」

「・・・・・ありがとう」

「じゃあまた明日ね、不動君、綾音ちゃん」

「ばいばーい」

「ああ、また明日」

お邪魔しました、と2人は不動家を後にした。

「・・・・・・ふう」

下着を含めた服という難関を突破したとはいえ、まだまだ問題は山積みだ。

さあこれから綾音をどうしようかと頭を悩ませる終夜だった。

第四話　新しいクラス

「俺は今から学校に行ってくるからきちんと留守番をしていてくれよ」

終夜が綾音と出会った翌日。
終夜は学園に行く前に綾音にきつく念を押しておく。

「学校？」

どうやら綾音は学校も知らないらしい。
昨日からいろいろと話していて分かったことだが、綾音には常識的な知識が欠けている。
さらには箸の持ち方も知らないほど生活知識もなかった。
それなのにロボットという存在を知っているのが不思議だったのだが、本人もよく分からないらしい。

「とにかくお昼はラップしてあるから電子レンジでチンして食べてくれ」

「電子レンジ・・・？」

「昨日教えただろ」

終夜は昨日のうちに家で留守番をするのに必要な知識を教えていた。
その中に電子レンジの使い方を教えていたのだが・・・

「あ・・・・・・あれ？」

綾音が思い出したというふうに指を指す。
指を指した先にあったのはトースターだった。
「・・・・・・もう一度最初から説明するよ」

◇◇◇◇

「ギリギリセーフ」
終夜はチャイムが鳴り終わると同時に教室に滑り込む。
今日は先日の実技の結果でクラス分けが行われていた。
入学式の時は仮であって、本決まりではなかった。
掲示板から自分の名前を探していたら、ギリギリになってしまったのだ。
しかし、遅くなった一番の原因は他にあった。
「まさか電子レンジからあそこまで苦労するとは思わなかった」
不動家の電子レンジの使い方は、温めたいものを中に入れて「温めスタート」というボタンを押すだけで済むものだ。
もちろんものによって設定が変更できるため他にもボタンやダイヤルはあるのだが、たいていはこのボタン一つで済む。
しかし、綾音はそれが気に入らなかったらしい。
「もっとボタンを押したい」
こんなことを言い出した。
「電子レンジを触ったこともないやつが変な欲を言うんじゃない」

「でも・・・・・・」

「でもじゃない。とにかく俺はそろそろ行かないと遅刻する。言った通りにやってくれよ」

さあ急ごうと玄関に向かうと、なにやらボタン音が連続で鳴り響いた。

「設定を全部キツイやつにするんじゃない！」

温めの強さが「自動」から「瞬」へ。
温め時間が「自動」から「長」へ変更されていた。
「瞬」はその名の通り一瞬で温めることができる。
創造を利用した画期的なアイデアということで一時期人気が出た電子レンジなのだが、食材によっては燃えてしまい、加減ができないので今では使われていない。

「野菜炒めを燃やす気か！？」

「人参とピーマンは燃えたほうがいい」

「キャベツも燃えんだよ！」

そこから人参とピーマンは食べたくないということで争っていた。
昨日は買い物に行けなかったから野菜炒めしか作れなかったのだ。
夜はカップ麺で過ごしたが、綾音にお湯を温めるなんてことができるわけがない。

「はぁ〜」

朝の出来事を思い出してまた心配になる。
帰宅したら火事になってたなんて洒落にならない。

「おはよう不動君」

「おはようございます」

やっぱり今日は家に帰ろうかと、変に気が変わりかけている中に小鳥遊姉妹が話しかけてきた。
どうやら同じクラスになったようだ。

「ああ、おはよう」

学校で女の子に朝の挨拶をするなんて何年ぶりだろうかと終夜は少し感動する。

「綾音ちゃんのこと？」

終夜が遅くなった理由を察して声をひそめて希が聞いてくる。

「まあね」

朝の出来事を説明すると、何と言ったらいいか分からないといった表情になる。

「た、たいへんね」

「家が火事になる大変だけは勘弁願いたいものだな。それより先生はまだなの？」

もうそろそろ来てもいい頃なのだが、まだ来ている様子はない。

「案外道に迷ってたりしてな」

とりあえず席につこうかと思ったところに、

知らない男が急に声をかけてきた。

「おっと、いきなりすまんな。俺は柊大河(ひいらぎたいが)だ。よろしく」

中学以来友達というのができなかった終夜は、入学仕立ての人はどうやって友達を作るのだろうと疑問に思っていたのだが、こういうやつから輪を広げていくんだなと妙に納得して自己紹介をしようとする。

「俺は・・・・・・」

「お前のことは知ってるよ。不動終夜だろ？有名だからな」

その言葉でこいつも馬鹿にしてきたのかと終夜は少し警戒する。

「ああ違う違う。俺はお前をバカにしたりなんかしねえよ。俺もあまり人のこと言えないからな。それに創造ができないことで有名ってことで知っているのは事実だが、俺が興味持ったのはもっと別のことだ」

「別のこと？」

「ああ。お前は入学してからたった二日でこのクラスの美人姉妹と仲良くなった男子生徒だからな」

確かに小鳥遊姉妹はこのクラスの中で一際目立つ。
実は周りの男子がどうにかしてこの２人にお近づきになりたいとあれこれ思案していたところに、終夜がすんなりと話していたものだから、創造ができないのとは違う意味で密かに目立っていた。
ただ、きっかけが終夜の創造ができないということだったために、さらに反感を買うことになっていたのだが・・・

「ボクたち美人姉妹だって。なんだか照れちゃうな～」

「ちょっと恥ずかしいです」

望はどちらかというと美人というより可愛い部類に入るだろう。
だがどちらも容姿が整っていて、入学したばかりの男子には話しづらいものではあった。

「お二人ともよろしく～。それで、興味深いことを話していた気がするんだが・・・」

図々しい性格だなと終夜は大河を評価する。
悪いやつではないだろうけど、興味本位でいろいろと首を突っ込んでそうだ、とあまりいい感情は持てなかった。
内容が内容だからどうはぐらかそうかと思案したところで教室の扉が開いた。

「ごめ～ん。ここに来る途中で道に迷っちゃって」

終夜にはこの教師の言っている意味が分からなかった。
おそらく終夜以外のこのクラスの生徒全員、意味が分からなかったことだろう。
まさか何気なく言った大河の言葉が当たりだとは思ってもいなかっ

た。
そもそも教師が学校内で道に迷う？　教師でなくても迷わないだろう。
「皆さん初めまして。私は今日からこのクラスの担任になる水城瑞希です。ちなみに私は創造が全然できませーん」
すごい高いテンションですごいダメなことを言う水城先生。
この学園はこのクラスに創造を学ばせることを諦めたのだろうか。
入学式の時は風邪で寝込んでいたらしい。
どこまでもダメな教師だと皆が感想をもつのは仕方がないことだと終夜は思う。
「じゃあホームルームを始めますね」
それから水城先生は何度も躓きながらホームルームを進行させる。
本当なら１０分とかからずに終わるものを３０分もかけて終わらせた。
そのせいか、次の授業の先生の額に青筋が浮かんでいた。

「やっと昼食タイムだー」
４限目の終了を告げる鐘が鳴ると同時に大河が昼食の時間をわざわざ大声で告げる。まだ先生は授業終了の合図をしていない。
「中学生気分が抜けてないやつがいるみたいだが、勉強はきちんとしとけよ」
４限目担当の先生は嫌味を含めた言い方をして退出していく。当然

そんなことに気にした素振りを見せない大河は自前の弁当を鞄から取り出した。

「お前、弁当あるんだな」

大河はたいしたことじゃないと返事をする。

「姉貴が作ってくれるんだよ。自分のを作るついでにってね」

そう言って大河は弁当に勢いよくがっつき始めた。

他の人はまだ弁当を出してすらいない。

「終夜、飯食べようぜ」

少し終夜とは離れた位置にいた湊が終夜を昼食に誘う。

大河のことには気づいていないようだ。

だが大河は違ったようで、湊に気づくとがっついていた弁当を一旦机に置く。

「お、有名人二号」

どうやら湊のことも知っていたようだ。

「（そういえば湊も一緒にいたからな。でも・・・）」

「終夜どうする？」

大河の声が聞こえなかったのか、湊が再度終夜に問う。

「月城湊だろ？」

「終夜は弁当持ってきたか？」

湊は無視を決め込んだようだ。

「（湊は大河みたいなタイプが嫌いだからなあ）」

以前に湊が言っていた。
俺の嫌いな人間はとにかく図々しいやつだ、と。
大河はそれ以外にも見事に湊が嫌うタイプだったのだ。

「無視かよー」

「月城君、無視しちゃだめだよー」

事情を分かっていない望が注意をする。

「そうだそうだ」

だが、大河は調子に乗ってしまった。
それでも望が湊を見つめるので最終的に湊は観念せざるを得なかった。

「なんだ？」

若干声が震えている。

「お、やっと気づいたか」

これは素で言っているのだろうかと終夜は心配になる。

湊は怒鳴り散らすことをしないタイプだが、それでもこの後どうなるか不安だった。

「・・・・・」

「ま、特に話すことはないんだけどな。お前も一緒に飯食おうぜ」

何かが切れる音がしたのは言うまでもないだろう。
それに気づかなかったのは大河だけだ。
その大河がふと思い出したように聞いてきた。

「そういえばさっきの綾音ちゃんがどうのって話についてだけど・・・」

「なんのことだ？」

終夜は湊には放課後にでも言うつもりだったのだが大河に言うかどうかは悩んでいた。
しかしこの空気をなんとかするにはちょうどいいかもしれないというのと、どうせ今はぐらかしてもしつこく聞いてくるだろうということで仕方なく話すことにする。

「・・・それはまた難しい問題だな」

やはり湊は真剣に事の難しさを感じて親身に考えてくれている。

「でもそれって見ようによっては軽く犯罪じゃね？」

やっと戻りつつあった穏やかな空気を大河が再びぶち壊す。

「状況を考えるに終夜の選択は正しい。そのまま放っておくほうがどうかしていると思うぞ」

「まあそうだけどさ。普通に犯罪だろ。しかも今は一つ屋根の下で2人暮らしだろ？どこのエロゲーだよって感じだよな」

「お前はもう少し言葉を選べ。無神経すぎるぞ。表面の状況だけで判断するな」

湊の言う通りではあったのだが、大河と同じことを一瞬考えた終夜は黙っているしかなかった。

「と、とにかく放課後皆で不動君のお家に行こ、ね？」

場の空気をなんとかしたいと思っての発言だった。
しかし皆で、ということは大河も含まれている。
それに気づいた湊は当然反論しそうになったが、望の考えに気づいて渋々了承した。

「ん？希少し顔が赤くない？」

終夜が希の異変に気づく。
実は先ほどの大河のエロゲー発言に反応して赤くなったのだが、終夜は気づかない。

「な、なんでもないです」

「体調悪いなら保健室で休んでた方がいいぞ。俺の家に来るのも今日じゃなくていいし」

「なんでもないんですっ」

「そ、そうか」

希の勢いに終夜はたじろぐ。
それでも納得のいかない終夜は、心配で希の顔を覗き込んだが、希は顔を隠してしまった。

「終夜」

「なんだ？」

湊が終夜の肩に手を置いて静かに首を振る。
その顔はどこか呆れていた。

◇◇◇◇

「いらっしゃい」

終夜が家に友達を招き入れたのは、湊を除いたら前回の小鳥遊姉妹が初めてだった。
終夜自身、高校に入学してから数日で大勢招き入れることができるなんて思ってもいなかった。

「けっこう広いんだな」

大河の言う通り、終夜の家は６人が入ってもまだ全然余裕がある。
玄関から入ると、目の前に螺旋の階段が見える。
一階にはトイレ、浴室、洗面所の他に三つの洋室があり、階段を昇ると右にダイニングとキッチン、左にリビングがある。

奥には二つの洋室がある。

「いや、これは広すぎだろ」

「希と望も昨日来たとき、かなり驚いたんじゃないか？」

「え、ええ」

「う、うん」

中学の頃に経験した湊が何気なく聞いたのだが、本人たちはなぜか歯切れの悪い返事をする。

「部屋は余ってるからいつでも泊まりに来ていいよ」

このセリフを言える時がくるとは思わなかった、と内心感動して綾音がいるだろう二階のリビングに案内をする。

「あ、しゅうや」

リビングでテレビを見ていた綾音は終夜に気づくと、とてとてと終夜のもとへ歩いてきた。

終夜は寄ってきた綾音の頭を撫でて、ただいまと言うと、即座に電子レンジを確認した。

「（よし、なんともないな）」

綾音の物覚えはよかった。

ただ天然の部分が物覚えの良さを悪くしていただけだったようだ。

「へえ～けっこうかわいいな」

小鳥遊姉妹の時と同じく、人見知りな綾音は終夜の後ろに隠れる。

「こんにちわ」

希が最初の時と同じように視線を綾音に合わせて挨拶をした。

「・・・・・・こんにちわ」

続いて望、湊、大河の順に一通り挨拶をして、綾音は警戒をほんの少しだけ解いた。
基本は挨拶から。綾音も挨拶を普通にかわせる相手にはある程度心を許せるようだ。
今日は綾音を紹介することが目的だったので、他愛もない会話を始める。
内容は自然と学校の話になった。

「そういえば知ってるか？鷹左右学園のクラス分けは実力順になっているんだ。Aクラスはもちろんのこと、俺たちEクラスは一番下ってことだな」

「それは知っている。だからなんだ？」

湊は大河に対して微妙に喧嘩腰だ。
しかし、大河の言う鷹左右学園のシステムは、学園の生徒なら誰もが知っていることだった。

「いや本題はここから。どうやら俺らEクラスは問題児扱いされているらしい」

「問題児？　ボクたちはまだ問題なんて起こしてないよ」
「いや、この場合の問題児というのは創造のことだろ？」
「その通りだ終夜。創造に関して欠陥がある生徒を集めたクラスがＥクラスらしいぞ」
この場合の欠陥とは、単に創造が苦手ということではない。
終夜のように媒体が定まっていなかったり、希と望のようにお互いが媒体で精神的に不安定な人たちのことを指している。
そして、終夜は大河の情報で疑問が一つ解消された。
なぜＥクラスは人数が他のクラスと比べて極端に差が出てしまっているのかということだ。
Ａクラスを除く他のクラスは平均３０人ほど。
Ｅクラスだけ、わずか１０人ほどしかいなかった理由だった。
だがここでまた新たな疑問が浮上する。
名門とも言われている鷹左右学園に、なぜ欠陥を抱えた生徒が１０人もいるのかということだ。
「その情報はどこからきたんだ？」
「俺、情報通なんだよ」
納得できる回答ではない。
というか質問に対する答えにはなっていなかった。
「そういえば、柊君の媒体ってなんなの？」
この場で媒体が何か分かっていないのは大河だけだ。

希は望で望は希。終夜はとりあえずペンダントで、湊は指揮棒だ。
この四人はたまたま試験の時お互い見ていたから知っていたのだが、大河だけは試験の時を見ていなかった。
そのため望の疑問はもっともだったが、普通は媒体のことを人に問うことはしない。
自分の媒体を晒すということは、自分の弱点を晒すのと同義だからだ。

「ん？ああ、俺はこれだよ」

大河は特に気にした様子も見せずにポケットから何かを取り出す。
ポケットから出したのはビー玉だった。
誰が見ても普通のビー玉だった。

「ビー玉・・・だよね？それが一番大切なもの？」

「ほら、子供の時ってなんでもものを集めたがるものだろ。子供の時に姉貴が唯一くれたビー玉が印象強くてな。それからビー玉ばかり集めてたんだよ。ま、それが今も続いてるってことだな。別に今もビー玉大好きってわけじゃないんだけど、なんかこれがしっくりくるんだよ」

「・・・・・・」

「皆黙りこくってどうした？」

重度のシスコンだと公言したことに、自覚はないようだ。
大河にとってはビー玉そのものより、姉がくれたという事実がうれしかったのだろう。
子供でそうなるのは分からなくもないが、それが今もなお引きずっ

ているというのは普通はない。
よほど姉が好きでなければ媒体に選ばれるまでにはならないということだ。

「でもそれって不確定媒体だよな？」

「お、よく気づいたな」

不確定媒体・・・・・・今回のビー玉のようにビー玉ならなんでもいいということだ。例えば湊が愛用している指揮棒は世界中に一個しかない。たとえ名称が同じ指揮棒が存在しても湊とともに歩んだ記憶までは同じではない。
しかし大河の場合、ビー玉ならその辺で売っているものでも何でもいいということだ。
これは一見有利に思えるが、実はそうでもない。
不確定媒体の時は決まって他にもっとしっくりくる媒体があるものだ。
不確定媒体だと５０％しか本領を発揮できないと言われている。
なぜこのようなことが起きるのか原因は不明だが、脳が様々な理由で一番大切なものをごまかしているのではないかと言われている。

「ま、それ以前に俺は得意な属性が分からないからな。不確定だろうが確定だろうがたいして関係ないよ」

得意な属性が不明というのは珍しいケースだが、５０％しか実力が発揮できないのならしっくりくる属性が見つからなくても不思議ではない。

「しゅうや」

急に今まで話に入っていなかった、綾音が終夜の名を呼びながら服を引っ張った。

綾音は終夜に意思を伝えたいとき、いつも終夜の服を引っ張って注目させる。

「あ、ごめん。今日は綾音を紹介するために呼んだのにな。学校の話ばかりしててごめんな」

皆も、綾音に関係のない話ばかりしていたことに反省して綾音を見る。

しかし、当の本人は気にした様子を見せずに、一言告げた。

「・・・・・・お腹空いた」

その時、間抜けにも綾音の腹の音がリビングに鳴り響いた。

第五話　お助け部（綾音とお風呂）

終夜が綾音と出会ってから2日経つ。
なんでか終夜に対する警戒が初日で完全になくなったため、終夜も今では妹のように接することができている。
綾音が最初に興味を持ったのはテレビだった。
箱の中で人やアニメのキャラクターが動いて話す。
まるで江戸時代からタイムスリップしてきたかのように、最初は警戒していて終夜の後ろから出ることができなかった。
終夜はなんども落ち着きながら説明して、テレビが安全でおもしろいものだと教えた。
そしたら警戒を解いた途端、テレビから離れなくなった。
だからこの時は"あれ"に入らなかったのだ。
そして2日目、終夜が友人を連れてきた日に、綾音は創造について興味を示した。
終夜が友人と話していたことを聞いていて興味を持ったようだった。
だが終夜自身、具現化がほとんどできないから実物を見せることができない。
かと言って理論を説明しても分らないだろうということで、とりあえず媒体が重要だという話をした。
そしたらうれしいことに、なら綾音の媒体は「しゅうや」、と言ってくれた。
どうやら小鳥遊姉妹の媒体がお互いだと聞いて、そう思ったらしい。
2日目の夜にはさすがに"あれ"に入る必要があった。
終夜は前日の夜に、綾音がテレビに夢中になっている間に入ったのだが、綾音はまだ入っていない。
さすがに女の子としてもこのままではいかないので、意を決して教えることにした。
綾音は常識や生活に関しての知識に欠けている。

箸の持ち方、電子機器の使い方、創造・・・・・
その中で困ったのはそう、“お風呂”だった。
当然お風呂の知識もなかった。
お湯で頭や体を洗う。
簡単なことだが、初めての人、特に綾音のような人が一人でできる作業ではない。
とりあえず最初は口で説明してお風呂場の外で待機。疑問があればその都度説明することにした。

「――というわけだ。理解できたか？」

「・・・・・・分かった」

綾音は自信満々といった感じでお風呂場に向かった。

「着替え忘れてるっ」

「・・・そうだった。今日のパンツは・・・・・・・・何がいい？」

「なんでもいいからっ」

「・・・そう・・・・・・ならこれにする」

綾音は毎回下着や服を選ぶのが楽しみだった。
毎日着る服を自分で楽しみながら選んでいるはずなのだが、なぜか最初に終夜に聞く。
そのたびに終夜はなんでもいいと答えるので、結局自分で選ぶ。
下着選びも同じだった。
終夜が、綾音がピンクの下着を選んだことに気づいて、パジャマと

お揃いだなと思ってしまったことは秘密だ。

「全部脱いだ？」

「うん・・・・・・これ」

横開きのドアを開けて、脱いだ下着と服を終夜に差し出す。

「こっちに渡さなくていいからっ。脱いだものは洗濯機に入れるのっ」

「分かった」

どうやら洗濯機を覚えていたみたいだ。今度は電子レンジに突っ込まれたら洒落にならない。
しかし、脱ぎたて＝温かい＝電子レンジの方程式が終夜の頭の中で成り立ってしまったのは秘密だ。
そうとうパニックになっているようだ。

「（これはしょうがない。女の子が間近で裸なんだから）」

初めて会った時とは状況が違う。
今回は妙に生々しいのだ。

「じゃあお風呂場に入って」

綾音がお風呂場に入ったのを確認して終夜は脱衣所に入った。
やがて、綾音は言われたとおりにシャワーを流す。
シャワーの音が消えるとゴシゴシという音が聞こえてきた。

「（言われたとおりにできてるじゃないか）」

何か必ずハプニングが起こると構えていたのが杞憂に終わりそうだと安心したのも束の間、綾音が声をかけてきた。

「背中に届かない」

まさかここまで頭が回らない子だとは思わなかった。

「そ、それはほら、タオルを横に伸ばして後ろに回すんだよ。そしたらのこぎりみたいにゴシゴシできるだろ」

「・・・のこぎりって何？」

「・・・・・・」

「・・・しゅうや洗って」

説明するのがめんどくさくなってきた。
いや、分かりにくい例えを出した自分が悪いのだ。
背中を洗ってやればいいだけ、もうついでに頭も洗ってやれば済むはずだ。
深く考える必要はない。相手はなにも考えてはいないのだ。自分が頭を悩ます必要はない。
そう意を決して、ズボンの裾をまくって風呂場に突撃した。
だが入った瞬間、終夜は後悔する。
当然のことだけど何も身に着けてはいない。
入った瞬間ダイレクトに綾音の裸体が視界に入ったのだ。
透き通る肌に浮かぶ滴。泡が肌から滑り落ちてきている光景。そして穢れを知らない無垢であどけない顔。

普通の思春期男子なら泣いて喜ぶ光景かもしれない。
だが終夜はここで理性を保つ必要があった。
一応の保護者として。
せめてここで恥ずかしがる素振りを見せてほしかった。
無防備すぎるのだ。この無防備な姿を見て、なんかもういいかな、と思ってしまうのが怖かった。

「と、とりあえず綾音、男の人がお風呂場に入ってきたらタオルで少なくとも前を隠せ」

「・・・・・・しゅうや、服着てる」

お風呂場は衣服を一切身に着けないところ、終夜は綾音にそう教えた。
綾音の指摘は確かに正しい。しかしそれは場合によって変わることを分かってほしかった。

「俺は綾音の背中を洗いにきただけだから」

「服・・・脱がないと洗えない」

「俺は洗わないのっ」

「・・・洗わない人は汚い・・・・・・・ってしゅうや言った」

「あとで・・・・・・いや、もう分かった。脱いでくるよ」

決して今説明するのがめんどうになったのではない。
このことで今後、また変な誤解で間違った知識に変わってしまうことを恐れただけだった。

終夜は腰にタオルを巻いて再度風呂場に入る。

「・・・しゅうや、前を少ししか隠してない」

「男はいいのっ」

「なんで？」

「俺の胸は固い。綾音の胸は柔らかい。これが理由だ。さっさと背中洗うぞ」

風呂に入ってもいないのに、すでにのぼせそうだった。
終夜が綾音の背中を洗っている間、終夜は綾音が自分の胸をふにゅふにゅと触っていたのを見ないようにするので大変だった。

「頭も洗ってやるから覚えなよ」

「・・・うん」

おそらく最初は嫌がるだろうと思って、終夜はシャンプーハットをあらかじめ用意していた。
試しにシャンプーハットをつけない状態で頭からシャワーを流してみたら暴れ出した。
抱きつきそうになったのですぐさまやめてなだめる。
そして今度はシャンプーハットをつけてシャワーを流す。
先ほどのがよほど嫌だったのか、頭を洗っている間、ずっと両手で顔を覆っていた。
綾音の髪は短いから洗うのにさほど苦労はしない。
一通り済まして綾音を湯船に入れる。
その間に終夜は自分の体と頭を洗うことに。

終夜が体を洗っている間、綾音がじっとこちらを見つめる。正確には終夜の胸を見つめていた。

「胸、固い？」

「男は固い。俺は筋肉もそれなりにあるしな」

「触っていい？」

「・・・少しだけだぞ」

「うん」

さわさわと触ってきてくすぐったさを感じたが、綾音は言われたとおりすぐに手を放した。

「固かった・・・・・・綾音は柔らかい・・・・・・触る？」

「触りません」

湯船に一緒に入ると言った綾音の誘いを丁重にお断りして2人は浴室を出た。

終夜は綾音の髪をドライヤーで乾かして櫛で梳いてあげる。

シャンプーハットもそうだが、櫛やシャンプー、リンスはすべて終夜が綾音用に買い揃えたものだった。

一通り終えた後、最後にフルーツジュースを与えて終夜はやっと一息つくことができた。

◇　◇　◇　◇　◇

高校には部活というのが存在する。
部活には創造を使う部もあれば、創造をまったく使わない部も存在する。
スポーツ系は創造を使わないのだが、剣道部、空手部等は限定された中で使用するルールもある。
Ｅクラスに選ばれる生徒は、当然創造を使わない部を選択する傾向にあるのだが、鷹左右学園にはその両方が含まれている部が存在していた。

「お助け部？」

「ああそうだ。ま、簡単に言うと部のスケットをするところだな。部活は創造を使うところと使わないところがあるから、お助け部にも当然創造を使う内容と使わない内容のスケットが転がり込んでくるってわけだ」

「まあ部活はどこかしら入りたいからな。特になければそこがちょうどいいんじゃないか？」

「私も賛成です」

「ボクもボクも」

あまりにもスムーズなやり取り。
大河の持ちかけた話に疑いはなかった。
そしてこの時大河の顔が一瞬にやりとしたことに、誰も気づかなかった。

「失礼しまーす」

「待ってたわ。柊君」

大河に案内されるまま部室に入ると、目つきの鋭い、パワフルな感じの女性が終夜たちを迎えた。

出るところが出ていて、引っ込むところが引っ込んでいる、非常にプロポーションのいい女性だった。

それに加え、どこか気品のある雰囲気を醸し出している。

「カガリさん、連れてきました」

大河の知らせで、カガリと呼ばれた女性は静かに微笑んだ。

「嵌められた・・・」

「みたいだね」

その様子を見て、大河がこの女性に頼まれて終夜たちを連れてきたのだと湊と終夜は気づいた。

「まずは自己紹介から。私はお助け部の部長をしている、2年のカガリよ。そのままカガリでかまわない」

とりあえず事情を説明するように終夜と湊は大河を睨んだ。

大河はあっけからんとした様子で説明する。

「カガリさんとは姉貴繋がりで知り合ったんだ。そこでお前らを紹介してほしいと頼まれてな」

「どうせ美人の頼みは断れないとかなんとかで軽く引き受けたんだろ？」

湊が決めつけるように言ったのだが、大河の答えは意外なものだった。

「いや、姉貴に脅された」

よほど恐ろしい脅され方をしたのか、微妙に震えていた。

大河のシスコン対象で、ここまで震える脅し方をする大河の姉に皆興味を持つ。

だが下手に興味を持って巻き込まれたら困るということで追及はしなかった。

「それで、単刀直入で申し訳ないんだけど、入部してくれないかしら？」

大河に嵌められた形をはいえ、終夜と湊は入部することに異存はなかった。

どちらにしろ入りたい部活がない。

希と望を見ると、２人とも異存はないようだ。

「この部には私と大河さんを含めて3人しかいなかったのよ。さすがに人手不足で困っていたの。入ってくれて助かるわ」

さっそくと、入部届を取り出して書くように促した。

見た目と雰囲気と同様、行動的なようだ。

「でも私たちじゃたいして力になれないと思うのですが・・・」

Ｅクラス生徒の集まりだ。創造がほとんどできないのと同義である終夜たちにこの学園の部活のスケットができるとは思えなかった。

「あら、創造をするだけが部活じゃないわ。私も運動とか苦手で、スケットの要請ってスポーツ系が多いのよ。だから気にしないで」

「でも・・・・・・」

男性陣は皆身体能力がそこそこあるが、希たちは部の助けになるほど運動ができるわけではない。

むしろ希もカガリ同様、運動が苦手だった。

「ふふ。本当のことを言うとね、大勢の人と一緒に部活をしたかったのよ。駄目、かな？」

上目遣いでのお願いではなく、妖艶な笑み。

そんなことを言われて断れるわけがない。

スケット以外に事務の仕事もあるからと説得されて希は入部届に必要事項を書き込む。

皆が書き終わってから縁が名前を確認しながら紙を集めていると、なぜか終夜のところで止まった。

「不動終夜・・・・・・あなた、小学校はどこ？」

終夜はカガリの質問の意図が分からなかった。

いや、思い当たることはあったのだが、それとカガリが何の関係があるのかが分からなかった。

人前であまり小学校のことは話したくなかったが、カガリの真剣な目を見て、これが単なる好奇心で質問したのではないと感じて口を

開く。

「・・・中央第一小学校」

「・・・・・・そう」

終夜が学校名を告げると、カガリは一瞬微妙な表情をしたがすぐににこやかになって紙をまとめた。

一瞬見せたその表情は、なぜだか嬉しさと悲しさが入り混じっていたように見えた。

「皆さんありがとうございます。さっそくで申し訳ないんだけど、終夜君と月城君の運動能力を確認するためにも、一つスケットをお願いしてもいいですか？」

その申し出を断る理由はなかったのだが、なぜか終夜だけ名前で呼ばれたのが疑問だった。

◇◇◇◇

カガリが出した部活は二つ。

空手部とサッカー部だった。

終夜と湊はオールマイティーに運動ができたが、空手部は先鋒枠が空いていてできるだけ強い人がいいとのことだったので、知識のある終夜が空手を担当することとなった。

「じゃあサッカーの試合に行ってくるよ。皆は終夜のほうを応援してくれてかまわない。俺は足手まといにならないようにかつ、そんなに目立たないようにするつもりだから」

「いや、俺も目立たないようにするつもりだけど」

「あら駄目よ。先鋒がそんなこと言っちゃ」

「・・・・・・」

普通ならここで女の子にかっこいいところを見せようということで気合を入れるところなのだが、あいにくと終夜にそんな気はない。むしろスポーツとはいえ、戦闘の形を取ることを極力したくはなかった。
しかも試合形式はフルコンタクトカラテ。
通常、高校生が行う空手は伝統空手といって、寸止めが基本のルールだ。
しかし、フルコンタクトカラテは寸止めをせず、顔面と股間以外の部位に直接加撃をするルールだ。所謂、実践空手というやつだ。
高校生が行うルールではない。
そのことに少し疑問を感じながらも終夜は道着に着替えて体育館に向う。
今回は他校との練習試合とのことで、そんなに固くなる必要はない。しかし、お助け部員としてスケットをするのだから、真面目にやらないわけにはいかなかった。

「それでは煌学園対鷹左右学園の練習試合を始めます」

両校挨拶を交わして先鋒が前に出る。

「おい、あいつってEクラスの下手糞だよなぁ」

「ああ。なんであいつがこの試合に出てんだ？」

「単なる目立ちたがりではないのは確かだな」
応援席で湊を除く皆が応援している隣で妙な会話が聞こえてくる。
「どういう意味でしょう？」
その会話を聞いて疑問に思う希に対して、カガリはただ微笑むだけだ。
一方、終夜も応援席の声が聞こえてきたわけではなかったが、自分に対する妙な視線を感じていた。
まるで自分がここにいるのが場違いだと言うような視線。
そしてお互いに防具を一切身に着けないことにもまた、疑問だった。

「構え！」

終夜は様々な疑問を振り払って目の前の試合に集中する。
試合時間は3分の三本勝負。
攻撃可能とされた各部位に「突き」「蹴り」「打ち」等を決め、相手を3秒以上ダウンさせるか、戦意喪失にさせた場合、「一本」勝ちとする。
顔面と近的への直接加撃と頭突きの禁止。
投げ、首相撲の禁止。
ただし背後からの攻撃は可能だった。
これはおかしい。さすがにダウンした相手の攻撃は禁止だったが、背後からの攻撃が可能というのが終夜の不安をより一層仰いだ。

「始め！」

試合開始の合図と同時にものすごい音が発生する。
試合開始と同時に終夜が後ろに吹っ飛んだようだ。

それはあまりにも一瞬の出来事だった。
応援席から見ていた希たちが気付いたときには、終夜が後ろに吹っ飛んでいて、相手は終夜が立っていた場所から少し前の位置で手を伸ばしていた。

「不動さん！」

「カガリさん、どういうことっすか！」

「あれは創造実践空手じゃないですか」

珍しく動揺を見せる大河がカガリに問い詰める形をとった。

「あら、言ってなかったかしら？」

創造実践空手とは、その名の通り創造を使用した実践空手のことだ。
ただし身体能力強化に限る。
「神（しん）」というエネルギーを身体の必要な部位に流し込む。
「神」とは、創造によって発生するエネルギーのことで、これを固めて物を創り出したり、そのエネルギーをそのまま身体強化に使用できる。
そして、「神」を操る者、創造する者のことを「創造主（そうぞうしゅ）」と言う。
創造主たる選手は、攻撃も防御も創造で強化して行うため、どんなに空手に強くても生身では絶対に勝てない。
しかし、終夜は生身の状態でかろうじて反応ができた。
相手の攻撃速度に反応したのではない。
試合が始まる瞬間、相手が普通の方法で攻撃してこないということに一寸早く気づいたのだ。
本来なら内臓までダメージがきているはずの攻撃を、かろうじて後ろに飛んだため、大事には至らなかった。

本来ならそれでも大怪我をしていただろう。だが終夜は一瞬攻撃が当たる箇所に、自分の創造力を集中させたから大事には至らなかったのだ。

「一本！」

審判の言葉を聞きながら終夜は立ち上がる。

「どうやらカガリ先輩に一本取られたみたいだな」

終夜にはまだ、余裕が見られた。

第六話　創造実践空手

「カガリ先輩どういうことですか！？」
珍しく息を荒げた希に対して、カガリはただ微笑むだけ。
「ありゃあ内臓とかヤバいんじゃないか？」
こちらも珍しく真剣な目で終夜の状態を確認すべく、目を凝らしていた。
「ふふ、見えなかった？終夜君はきちんと反応して後ろに飛んだわよ」
「後ろに飛んだだけでなんとかなるレベルじゃない気がするんだが」
「見ていれば分かるわ。終夜君はあなたたちが思っている以上に強いわよ」
にこにこと笑うカガリの目には、確かな自信と期待が見えた。

◇　◇　◇　◇　◇

吹っ飛んで壁に叩きつけられるぐらい威力があったはずなのに、終夜は無傷だった。
強いて言うなら、叩きつけられたときに背中を少し痛めただけ。
それでも怪我と言うほどではない。
終夜の表情には余裕が見られたが、頭の中まで余裕ではなかった。

「（まさかこんなことになるとは・・・・・・見事に嵌められたなあ。さて、どうするか・・・）」

このまま怪我を理由にして棄権をすることはできる。
しかしお助け部として、仕事はきちんと果たさなければならないという使命があった。
本来なら終夜はカガリに嵌められたのだから棄権しても文句は言えない。
しかし終夜は妙なところで人が良かった。
もともと綾音の時もそうだ。
自分の家に置く以外に、もっとよく考えれば他にいい方法があっただろう。
それでも自分がきちんと面倒を見なければと妙な使命に燃えていた。
今も同じだ。
お助け部員としてきちんと依頼は果たさなければならない、と。
それに加え、相手の様子を見て今なら余裕だ、と終夜は確信した。

「おいおい起き上がれるかぁ？」

「心配には及ばない」

馬鹿にした言い方をする相手に対して、終夜はたいしたことないと答えて位置に着く。
応援席の人たちも含め、対戦相手は軽く動揺していた。
下手すれば死んでもおかしくない攻撃に直撃したのにもかかわらず平気な顔をしている。
だがこの場にいる者の誰一人、終夜が創造を使ったとは思わなかった。
Eクラスの、しかもあの有名な不動終夜が身体能力強化なんて使えるわけがない。

この創造実践空手は、空手の形をした身体能力強化を競う競技である。
もともと身体能力強化は上位の技術だ。
自分の創造を自分の中で形成する技術。
自分がどうなりたい、こうしたいというのを強く想像するのだが、これがけっこう難しい。
重要なのは創造力という形をどう想像するかだ。
創造力に形はない。人それぞれどういうものなのかを想像して、神をそれぞれの部位に流し込む。
終夜が見たところ、この対戦相手はそれなりにうまい。
しかし、余裕を見せすぎていた。
本来は構えた時点で、身体全体に神を流し込んで攻撃と防御を同時にとるものだ。
だがこの対戦相手は防御を一切せず、手と足の先にしか創造力が流れていなかった。

「始め！」

相手は先ほどと同じように猛スピードで終夜に向かってパンチを繰り広げる。
しかし今度はきちんと見えていた。
終夜は右手に神を流し込み、腕を横に振るった。
まるで自分の周りに飛んでいる蝿を払うかのように。
当然防御を一切していなかった相手は真横に吹っ飛んだ。

「い、一本！」

あまりの出来事に観客はどよめいく。
この場にいる鷹左右学園の生徒は皆終夜を知っている。
創造ができないという認識で。

その終夜が相手を一撃で吹っ飛ばしたのだ。
単に運動神経がいいというだけでは説明がつかない出来事。
反応できただけでも意外なのだ。

「何が起きたんだ？」

観客の誰かがつぶやく。
誰一人として終夜が何をしたのか目視できなかった。
対戦相手は気絶している。
内臓まではいかなくても骨までは確実にきているだろう。

「続行不能により、勝者不動！」

終夜は一礼して後ろへ下がった。

◇　◇　◇　◇

「すごかったぜ終夜」

「不動君って創造が上手だったんだね」

練習試合が終わって、更衣室から出た終夜を口々に賞賛する。
結果は３－２で鷹左右学園の勝利に終わった。
それでも空手部員は大きく喜ばず、相手校も含め終始微妙な雰囲気が続いていた。

「ほんと、私も実際に見てびっくりしちゃったわ」

いけしゃあしゃあと、カガリまで褒めたので終夜は睨んだが、にこにこと微笑むだけ。

カガリのおかげで周りの終夜に対する評価が変わったに違いない。
これは終夜が望んでいなかった結果だ。
今まで嘘をついていたわけではない。具現化は本当にできないから中途半端にできるところを見せたくなかっただけ、そう皆に説明した。

「月城君のほうも大活躍だったそうじゃない？」

「・・・・・・」

こちらもカガリをジッと睨んでいる。

「俺のほうもまんまと騙されましたよ。まさか創造ありの変則ルールだとは思いませんでした」

湊のサッカーも創造を含めたなんでもありのルールだったようだ。
サッカーで創造を使うなんて話は聞いたことがないが、たまにお遊びでやることがある（教師の立ち会いが必要）。
そんなことにスケットを頼むなと文句を言いたいところだが、それ以上にカガリに文句を言いたかったのは言うまでもないだろう。

「私も直前まで知らされてなかったのよ。今度は気をつけるから許して、ね？」

悪びれた様子がまったく感じられないものの、陽気な先輩の姿を見て毒気を抜かれたのか、２人ともため息をついて帰宅の準備を始めた。

「そろそろ帰ってもいいですか？」

「ええいいわよ。お疲れ様」

最後まで笑顔を崩さなかったカガリは、手を振って終夜たちを見送った。

「お二人とも今日はお疲れでしょうからタクシーにします？」

２人は希の提案に乗ることにした。

タクシーと言うと、昔はお金がかかるから高校生が下校時に利用するものではない。

だが現代のタクシーは昔とは違い、お金が一切かからない。

理由はいくつかあるが、現代のパソコンにはイマコン（Ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ　Ｃｏｎｔｒｏｌｌｅｒ）というものがついているのが理由の一つだ。

重要なのは「想像」であって、「創造」はその延長線上にある。

イマコンも「想像」することによって動かしたいことをインプットして動かす。

イマコン自体はコントローラーという名称があるが小さなチップの形をしているため、専用の人形にくっつけてインプットした通りに動かすことも可能だ。

「終夜、あの先輩のことどう思う？」

タクシーの中で湊が話を切り出す。

もともと終夜と湊はあの程度で疲れるほどやわな体をしていない。

希が提案した時、湊が終夜に目配せをしたのだ。

「嵌められたことか？」

「お前のことを知った感じだったが」

「何か知っているのは間違いないだろうな。だけど俺の顔を最初に見たときはそんな素振り見せなかったし、俺の名前を見て気づいたみたいだったから気にすることもないと思うぞ」

真面目な調子で話す湊に対して、不真面目とまではいかなくても、真面目とは言い難い口調で答える終夜に湊はため息をついた。

「・・・・・・まあ今は様子を見ておこう。ちゃんと気を付けておけよ」

「あいよ」

湊は一つ気になっていた。
終夜を確かめるために創造実践空手に行かせたのは分かる。
しかし、なぜ自分まで試されたのが分からなかった。
しかも聞いたところによると、カガリに頼まれて急遽創造を使ったサッカーに変更したようだった。

一方、終夜も湊とは違う部分でカガリに興味を示していた。
あの人は自分の過去とか以前に、大河たちを含めた全員に何かを隠していると。

◇　◇　◇　◇

「ただいま」

「あ、しゅうや・・・・・・おかえり」

終夜が学校から帰ると決まって綾音が迎えてくれる。

毎日一人で家にいるのはさすがに退屈なようで、終夜に遊びを迫る。
最近では対戦格闘ゲームにハマっていた。

「今日も・・・あれ・・・・・・」

綾音が指さした先にあるのはテレビゲーム。

「今日もやんのかよ」

綾音は当然ゲームなんて最初は知らなかった。
だが綾音は妙に物事の吸収が凄まじかった。
終夜は決してこのゲームが苦手なわけではない。
だが綾音の吸収力は終夜の今までの経験を上回っていた。

「また負けた・・・・・・」

「しゅうや・・・弱い」

「綾音が強すぎるんだ」

「・・・次」

二回戦を急かす。
だが、何回やろうと終夜の負けは目に見えていた。

「待て。そろそろ違うゲームにしよう」

「・・・ずるい」

このずるいと言うのは、新しいゲームにしたら今日中には勝てない。

それを分かっているから終夜も提案したのだ。
もっとも明日になるころには、終夜の負けが確定しているのだが。

「今度はレースゲームだ」

この日は半周の差をつけて終夜が勝利した。
だが次の日、終夜は一周の差をつけられて惨敗することになる。
だがそんな綾音も手先まではゲームのようにはいかなかった。
ものすごい不器用なのだ。
頭で理解できていても身体がそれに追いつかなければ意味がない。
だったらゲームも不器用になれよと終夜が思うのは無理もないこと
だが、好きこそ物の上手なれ・・・・・終夜のいない間に練習し
たらしい。

「ほら、綾音の好きなご飯の時間だぞ」

終夜が夕食を作っている間、綾音は先ほどのレースゲームを練習し
ていた。
終夜がチラッと見たときには、ＣＰＵ相手にギリギリで勝利してい
た。
明日はあれが大差に変わることだろう。
もちろんＣＰＵだけでなく、終夜が相手でもだ。
「好きなことをやった後にはたいていい嫌なこともあるもんだ。どう
いう意味だか分かるか？」

「・・・箸」

「正解」

綾音は終夜の家に来てから様々なことを学んだ。
お風呂の入り方、服の着方、ご飯の食べ方等・・・・・
お風呂はまだ心配だが、他はだいたい自分でできるようになった。
そんな中、綾音は箸だけが未だに使えなかった。
今でも箸を握りながらぶっさして食べている。
いつまでもその食べ方はよくない。

「今日はチャプチェだ」

春雨を炒めた韓国料理だ。
伝統的な前菜で、宴席料理でもあるのだが、ご飯と一緒に食べる。
変な名前だが、なかなかおいしい。

「ふぉーくは？」

「まずは箸を使う練習だ」

「ぶー」

頬を膨らませて抗議を表す。
綾音はずいぶんな食いしん坊キャラなのだが、箸を使って食べると
どうしても食のスピードが下がる。
というよりほとんど食べられない。

「豆腐を箸で食べられるぐらいにはならないとな」

「・・・・・」

以前に食べた時、粉々にしたのを思い出したのだろう。

「・・・まあ豆腐は置いといて、普通に扱えるようにはなってくれ」

「明日から頑張る」

出来ない人の典型だ。

諦めた終夜はおとなしくフォークを差し出した。

第七話　部活勧誘一日目（始）

「鷹左右学園・・・実験にはうってつけの学園だな」

マッドサイエンティストの研究室、という名称がぴったりの暗い部屋に一人、白衣を着た中年の男が呟く。

「それにあの学園の生徒が『あれ』を目覚めさせたか」

中年の男が言う『あれ』。
画面に映っているデータには『Ｐｒｏｊｅｃｔ．ＨＥＲＭＩＴ』と書かれている。

「手始めに爆弾を放り込んでみるとしよう。さて、どう処理してくれるか」

男はクックックと、不気味に笑いながらワインの入ったグラスを口に近づける。
この男にとってＨＥＲＭＩＴが「誰か」ではなく、「どう処理するか」が重要だった。

◇◇◇◇◇

入学仕立ての一年生には部活の勧誘というのが待ち受けている。
鷹左右学園ほどの高校ともなればその勢いは凄まじいものがある。
終夜たちは部活が決まっているが、周りの動きまで落ち着くわけではない。
創造の使用は基本的には禁止されていないが、当然人に対する無意味な攻撃的な創造は学院以前に法律的に禁止されている。

もっとも、いくつか決められた組織の許可があれば人同士の戦闘も認められる。
空手、柔道、ボクシングは試合での殴り合いは許可されているが、路上での殴り合いは犯罪になる。
だが、創造は少し扱いが違う。
無意味な死傷者を出すことを避けるために法律で禁止されてはいるが、基本的には問題ないのだ。
そして部活勧誘時はいわばお祭り状態だ。
お祭りとなれば争い事が自然とあちこちに生じる。
死人はさすがに出ないが怪我をする人は少なくない。

「そういうわけで皆にも手伝ってほしいのよ」

カガリがいつもの調子でにこにこ笑顔を崩さないまま終夜たちに告げる。

「手伝うって具体的に何を？」

この話の流れからするととんでもない内容になる。
少なくともこのメンバーに頼むのはおかしい。

「だ・か・ら、お祭り気分のいき過ぎた生徒を宥めるお手伝い？」

「だからですね。僕たちはEクラスですよ。それにそういうのは収束部の仕事のはずでしょう」

収束部・・・・・・・・・理事長の次に権力があると言われている生徒会長率いる組織だ。政府直属の機関であり、主な活動は学外で行われる。
学内の風紀等も管理する立場でもあるが、それはあくまでおまけに

すぎない。
政府からの依頼を受けて学外で起きた事件を解決する組織である。
「お前知らねえのか。収束部は今この学院にいないんだぜ」
学外の任務が多い収束部が学院にいないことは別に珍しくない。
自称情報通を語る大河の説明に湊は軽くため息をついた。
いないことが珍しいとはいえ、この時期にいないのは困りものだ。
「私収束部に依頼されたのよ。勧誘時のごたごたの収束を。だから
この期間だけ収束部の権限が持てるのよ。もちろん学内限定だけど」
学内限定とはいえ、収束部の権限が持てるのはすごいことだ。
権限と言っても創造の自由使用と取り締まることだけだが、一般の
生徒からしたら魅力的になる。
そもそも収束部はなりたくてもなれないからだ。
「だから俺たちは一番創造の下手なEクラスです！」
珍しく息を荒げる湊。
だが無理もない。
カガリとの会話は会話にならない。
正直イライラしてくるのだ。
「だからその実力を部活で試したんじゃないの。二人には十分その
力があるわ。それに見ての通りうちは人手不足だから」
それが湊まで巻き込んだ理由なのか。
カガリの言い分は終夜も予想していた。
だが、まだ足りない。

「希と望は？」

「彼女たちももちろん参加してもらうわよ。班は二人三組だから問題ないわ」

問題ありまくりの回答に、さてどう言い返そうかと考えたところで湊が意外なことを言った。

「分かりました、それでかまいません。組み分けはこちらで決めてかまいませんね？」

「いいわよ〜」

お気楽な調子で言うカガリにどうもと言って一旦部屋を退出するように湊が促す。

部屋を出ると、湊は一旦ため息をついた。

終夜はすぐに湊の意図を読んで皆に告げる。

「じゃあ俺は希と組むよ。大河は先輩と組ますと使えなさそうだから望とな。湊はやりにくいだろうけど先輩と頼むよ」

「ああ」

終夜は何気なく淡々と決めたが、これは湊の考えに沿っていた。

あのまま話していてもカガリは絶対に引かなかっただろう。

そこまで引かないのには何かしらの理由があるに違いない。

人手不足だと言うのはわかるが、それなら収束部の依頼が来ることはまずない。

そんなに甘い組織ではないからだ。

だが実際に収束部から依頼がきているところから見て、カガリ、またはお助け部には終夜たちが来る前から収束部が一目置く存在であったに違いない。
そんな存在がわざわざいろいろと御膳立てしてまで自分たちを利用するには何かしらの意図があると踏んでいい。
だから湊は実際にカガリを自分の目で観察することを選んだのだ。
本来はそういうことは終夜がやったほうが何かと都合がいい。
終夜の洞察力のほうが当てにできるのは確かだが、カガリは終夜に対して少なからず興味を示しているから外しておく。
それにこういうことは湊の仕事だった。
終夜ができることは湊をサポートすることだ。

「分かりました」

「了解」

「りょ〜かい」

「先輩の色香に惑わされるなよ」

「それはお前にも言っておきたい」

軽口を叩きながら笑う二人の様は、長年のパートナーのようだった。
この2人はいつもこの調子だ。
お互いの役割をきちんとこなし、パートナーがこなせるかどうかの心配はしない。

「なんだか羨ましいです」

希の呟きに望が密かに反応する。

まるで兄弟のような二人に自分たちを当てたのだろうか。
その呟きに望は何も応えず、希もそれ以上何も言わなかった。

「そろそろ相談終わったみたいね」

気づけばカガリが扉から顔を覗かせていた。
部室の目の前で話していたのだから聞かれていてもおかしくはない。
だが今の会話に聞かれて困ることはない。
終夜と湊はあえて聞こうと思えば聞ける場所で聞かれても困らない方法をとった。
あえて外に出て話したのにわざと聞こえる場所で話す。
心理的な動揺を誘うためだ。
人は分からない理由を重ねると余計分からなくなってしまう。
なぜあえて外で話したのに、なぜ簡単に聞こえるところで話すのか。
それなのになぜ内容はたいしたことないのか。
一つ一つは小さくても理解できないことが重なるとどうしても変な勘繰りをしてしまう。
たいして意味は出ないが、簡単ないじめだった。
もっとも、このカガリに効果があるかは微妙なのだが。

「聞いてたとおりです」

「え、私今来たんだけど？」

やはりやりにくい相手だと思いながら終夜は先ほど決めたことを報告する。

「あら、私には終夜君がつくと思ったのだけど？」

「終夜は希とが一番相性いいんですよ。逆に俺と相性のいい人はい

ませんから」

「余りものかぁ」

あからさまな失礼な言い方に湊は動じない。
カガリも終夜たちの意図を読んで挑発をしているのだろう。

「それでいつから行動を？」

「今日から」

「・・・・・・」

今さらいちいち反応しない。
だけど、この部活に入ったのは本当に失敗した。
そう誰もが思ったのだった。

◇◇◇◇◇

「じゃあ各ルートの巡回をよろしくね～」

お助け部部活勧誘巡回。
各組決められたルートを一斉下校時まで巡回する。
その間に創造を使用した争い、または創造をいずれ使うと見られる争い、強引な勧誘の仲裁に入る。
その際、こちらが創造を使うのはかまわない。さらに相手が過剰な反応をした場合、こちらも過剰に対処しても問題ない（大怪我をしない程度）。
取り締まった場合はお助け部に待機している人（今日は湊とカガリ）に引き渡して報告書をまとめる。

三組のうち回るのは二組で、一組は待機だ。
たった二組でこの広い学園を回るのは厳しく感じるが、勧誘ができる場所は決められているからそんなに広くない。

「じゃあ行くか、希」

「はい」

一日目からカガリと2人きりで部室にいなければならない湊に少し同情しつつ、巡回を始める。

「や、やっぱり賑やかですね」

何かに緊張した様子の希に、何も気づいていない様子の終夜が答える。

「そうだな。俺はこういう中でどの部活に入るか決めるべきだったと後悔しているよ」

やはり大河はトラブルメーカーだと思いながら、周りを警戒する。
ぶっちゃけた話、いつ具現化されたものが飛んでくるか分からないからだ。
それに加え、一つ気になる話をカガリが言っていた。

「収束部ってけっこう嫌われているのよ。でも収束部に選ばれるほどの人たちでしょ？だから手を出しても返り討ちにされる。だけど今ならどうかな？」

これの意味することは一つ。
収束部に対して今まで手を出せなくて悶々としていたところに、急

に収束部面をしたやつが取り締まりだしたらいい気持ちはしないだろう。
今こそと終夜たちに日ごろの恨みをぶつけかねない。
だから常に周囲を警戒する必要があった。

「あ、あのっ」

最初の一言から黙ったままだった希が意を決したように口を開く。

「何？」

「ど、どうして私を選んでくれたのですか？望でもよかったはずですし・・・」

「ん？いやぁ望には悪いけど、希といたほうが落ち着くからね」

これは本心で特に他意はない。
しかし、本人の思っていることと相手が思っていることが必ずしも一致するとは限らない。

「そ、そういえばさっき相性がいいって・・・」

終夜に聞こえない声でボソボソとつぶやく希は、周りどころか前すら見ていない。
そんな妙に乙女心全開のところにボールが飛んできた。

「危ない！」

いち早く気づいた終夜が声をあげながら、希の腕を引っ張る。

「ふ、不動さん！？」

引き寄せた結果、自然と終夜と希が抱き合う形になる。
希は内心ドキドキだったが、終夜は違っていた。

「今のがボールだったからよかったけど、きちんと警戒したほうがいいよ」

「はい・・・」

本来ならドキドキする形に終夜は的外れなことを言う。
いや実際正しいのだが、やはり終夜はどこかズレていた。

「ん？なんか人だかりができてるな」

ドキドキと反省の感情を交えたままの希と何も感じていない終夜が喧噪を見つけて中に入っていく。
喧噪の中心には筋肉むき出しの二人の男子生徒がいた。

「この場所は俺たち空手部だろ」

「ふざけんな。今日はボクシング部のはずだ」

どうやらお互いが把握している部活勧誘の時間が重なっていたようだ。
空手部のほうは、終夜も見覚えがある。

「ストップ。状況は理解できましたので少し待ってください。今確認します」

終夜が二人の間に割って入り、手で制しながら希に目配せすると、希は携帯で確認を取り始めた。

「ちょっと待てや。収束部気取りの野郎に指図される覚えはねえ」

「気取りでもきちんと権限は持ち合わせています。指示に従えないなら強制退場してもらうことになりますが？」

「一年がほざくな！」

終夜に喧嘩を売ってきたのはボクシンブ部の男。

空手部の男は以前スケットをした時に顔を合わせているからか喧嘩を売ってはこない。

ボクシング部の男は終夜に殴りかかってきたが、終夜は軽く拳を叩(はた)き、その手を掴んで男の背にまわしてそのまま抑え込んだ。

「どうだった？」

男を抑え込んだまま終夜は希に問う。

「どうやら複数の資料に書かれている部活名がそれぞれ違うみたいです。なのでどちらが正しいか分からないようです」

希の報告に終夜は頷いて間を開けずに口を開く。

「それなら今回は空手部が使ってください」

「なんでだっ」

終夜の指示に当然ボクシング部から文句が出る。

「ボクシング部のメンバーが俺に手を出したからです。しかもこの人は主将か副主将ですよね？ならこれ以上言葉はいらないはずですが」

「くっ・・・」

「では俺たちはこの人を先輩に引き渡しますので、これで失礼します」

終夜はわざと大きめの声で退場を告げる。
これは、争いはこれで終わりだと見物人に告げるためだ。

「趣味が悪いぞ」

見物人が散っていく中、終夜は見物人に交じっていた大河に向けてそう言い放った。
大河が最初からニヤニヤしながら見物していたのに終夜は気づいていた。

「すまんすまん。それにしてもすごい手際だな」

「あのなあ、しどろもどろしてたら、たとえ内容がしっかりしていても説得力がないだろ」

「お前、それ全校生徒前のスピーチでも同じことが言えるか？」

「言えるだろ」

言ってる意味が分からないというふうに答える終夜に大河は苦笑い

する。
希と望と大河の終夜に対する根本の評価は同じだろう。
終夜はどこかズレている、と。
「とりあえずこの人をカガリ先輩に引き渡すからあとよろしく」
「離せっ」
抑えられている終夜の手からなんとか逃げ出そうと体を揺らすが、終夜はがっちり捕えている。
「こういう場合って寝かせてもいいんだっけ？」
「いや、一応先輩なんだからやめといてやれよ」
「冗談だ」
真顔でそう答える終夜に大河は未だに苦笑い。
「不動君って、月城君と柊君を足して2で割ったような感じだね」
それは褒められているのだろうかと終夜は少し考える。
終夜の微妙な表情を読み取ったのか、望が付け加えた。
「不動君って柊君ほどおちゃらけてはいないけど、普段は賑やかでしょ。でもいざって時は月城君みたいに冷静に物事を対処するから二人の平均かなあって」
「俺ってそんなにおちゃらけてる？」

大河の呟きにスルーしつつ、終夜は過大評価だと答えた。
「俺は湊ほど冷静に対処はできないよ」
終夜は少し表情を落としながら言う。
望の言った冷静な対処というのは物事の大きさに左右される。
生徒同士の軽い喧嘩程度はたいしたことない。
でも、もっと大きな事件が起きたらこんなふうにはいかないだろう、と。
終夜は口には出さなかったが、希は終夜が何を言いたかったのか分かったのだろう。
口調を明るくして言った。
「そろそろ行きましょう不動さん。望と柊さんもサボっちゃだめですよ」
「へーい」
「分かってるよ」
どうも信用に欠ける返事を聞きながら、終夜と希はその場を後にした。

第八話　部活勧誘一日目（終）

「さっそく捕まえてきたわね」

終夜が部室の部屋を開けて早々に、そろそろ来ることが分かっていたらしいカガリが、足を組んで両手で頬杖をつきながらそんなことを言った。

湊は書類整理をやっている。

一人でやるには多すぎると言える量を。

まあ当初の目的からは外れてないから大丈夫だろうと、終夜は声をかけずにカガリに報告する。

「ボクシング部の副主将二年、槙原浩二（まきはらこうじ）。喧嘩の仲裁に入った際、俺に創造を使って殴り掛かってきたので拘束しました」

このボクシング部も創造使用ありの部活だ。

神付加による常人には目視できない速さでパンチを繰り出したため、創造を使ったかどうかまでは一般人には分からないものなのだが、これは終夜にとってはむしろ得意分野だった。

「ま、その程度なら部活動停止ぐらいでいいでしょ。ご苦労様」

「お前、俺が創造したなんてわかんのかよ」

これは驚きではなく、無駄な足掻き。

創造を使わずに殴り掛かってきたらここまで大事にはならない。

だからここぞと足掻いているにすぎない。

常人に創造を使ったかどうかなんて分からないからだ。

創造して具現化する際、『思念』というものが飛び交うのだが、身

体能力強化の際にはこの『思念』は飛ばない。
実力のある者なら目を凝らせば身体能力強化に創造を使っているのが分かるのだが、終夜はEクラス。
分かるはずがない思われても仕方がなかった。

「あなたは創造を一切使用していないと？」

カガリの目が鋭く、冷たい表情になって槙原に問う。
その場にいなかったカガリが、実際に創造を使ったかどうかなんて分かるわけがない。
でもこの時槙原は、すべてを見透かされたような感じがしていた。
流れる汗が止まらない。
槙原だけではない。湊も希もわずかに恐怖していた。

「い、いえ・・・・・・」

同じ二年生に敬語になる槙原。
目も合わせられず、生気を吸い取られたように脱力していた。

「ご苦労様。引き続き巡回お願いね。報告書は放課後まとめてやってもらうから」

笑顔で言うカガリに、終夜は「はい」と答えて、少し怯えていた希の手を引っ張って早々に退出した。

「怖がらなくても大丈夫だよ。基本的には無害だと思うから」

終夜は心の中で自分と湊以外はと付け加えて、希の怯えを取り払うように言う。

「大丈夫です。少し顔が怖かっただけですから」

希はカガリのあの姿に重ねるものがあったのだろう。
それにあれは生物として反射的に感じる恐怖に近かった。
カエルが蛇に出会ったら、反射的に恐怖する。
たとえむこうが友好的であっても、体が勝手に反応してしまうのだ。
カガリのあの姿に終夜でさえ、少し引いたぐらいだ。

「巡回とはいえ、勧誘の雰囲気だけでも楽しもう。俺らは体験できなかったから」

大河のせいで、と少しふざけた口調で希に言う。
終夜が気を遣ってくれたことに気づいた希は笑顔で「はいっ」と答えた。

◇◇◇◇

「結局今日取り締まったのは2組合わせて3人ね。どれも大事にはならなかったみたいだしよかったわ。私としてはちょっとつまらないけど」

団体でのいざこざがなかった分、人数も少なかった。
あれから終夜はまた1人捕まえて、大河も1人だ。
望が妙に興奮していたことから、大河も活躍したのだろう。
各自、報告書をまとめて帰路に就いた。

「柊君すごいんだよ。ビー玉をはじいて相手を昏倒させたんだから」

「たいしたことねえよ」

自分の時は先輩に対して眠らすのはやめといてやれと言っておきながら、昏倒させるなんてと終夜は心の中でツッコむ。
望が言うには、相手が終夜の時と同じく殴り掛かってきたようだ。
しかし相手は大河ではなく、女の子の望に向かって。
大河はすぐに反応してビー玉を相手の額に飛ばしたらしい。
終夜はそれを聞いて、それは昏倒させても仕方ないなと納得する。
おそらく自分の場合だったら相手に外傷を与えかねなかったと内心ホッとしていた。

「飛ばしたビー玉は媒体のほうか？」

これは創造で具現化させたビー玉なのか、自分の媒体に神を付加させて飛ばしたものなのかという意味だ。

「ああ、今回は媒体のほうを飛ばしたぜ。とっさだったからな」

「それはすごいな」

「そうか？まあだからいつもビー玉は複数持ってんだ」

自分の媒体を武器に飛ばせるのはすごいことだ。
確かにビー玉という、持ち運びのいい不確定媒体なら可能ではある。
具現化したものを飛ばすとなると、創造↓具現化↓射出という手順になるが、媒体そのものを飛ばすとなると、神を付加する↓射出と手順を一つ飛ばすことができる。
特に、創造↓具現化は上手い人でないと時間がかかるもの。
これは力が拮抗したバトルの際に、大きなアドバンテージとなるものだ。

「不確定媒体っていうのも不便なことばかりじゃないんだね」

陽気に言う望に、大河はそうでもないさと答える。
力が拮抗した際に大きなアドバンテージがあるとはいえ、拮抗するレベルでなければ意味がない。
本来の実力の５０％しか出せないため、ほとんどの敵には敵わない。
大河はそれを痛いほど理解していた。

「湊のほうはどうだったんだ？」

「ああ・・・・・・」

話題を変えるために湊に振った大河だったが、本人の顔は少しやつれていた。

「そういえば俺が部室に行くたびに書類の整理してたな」

もっとも、あの量なら仕方がないと言える。

「なんの書類だったんだ？」

「今までスケットをした際の報告書の整理と、依頼がきていたのを俺の判断でスケジュールを組ませられていた」

「報告書の整理ってあの量全部か？」

「いや、先生に頼まれたっていう全く関係ないやつも含まれている」

「・・・・・・一年にやらせるものじゃないな。湊じゃないとできなかっただろうし。いや、湊でも厳しかったか」

当初の目的を考えると、湊の本番は明日からだ。
だがこの調子だと、一筋縄ではいかないだろう。
それが分かっていても湊は決して後悔はしない。
お助け部に入ったことは後悔しても、自分で決めた仕事を投げ出すようなことはしない。
だがその成果もあって、分かったこともある。
過去の報告書をまとめるほどあったのだから、お助け部というのが前々からあったのは間違いない。
これで終夜と湊が感じていた違和感の一つが杞憂だったと証明された。

「それでスケジュールのほうはどうだったんだ？」

「とりあえず文系は数が少なかったこともあって希と望たちにすべて振り込んだ。ただ・・・・・・」

「ＯＫ、もう理解した」

湊が深く悩んだ理由が分かった終夜がげんなりとした様子でそう言う。

「え、どういうことだ？」

よく分かっていない大河の疑問に、疲れている湊の代わりに終夜が答えた。

「要するに文系よりスポーツ系が多かったんだろ。それもおそらく創造を使う部活だ」

「ご明察。あの人、おそらく俺に決めさせる前からある程度振り分

けてたに違いないよ」
あえて創造を使うスポーツのみスケットの申請を許可したということだ。
お助け部がそんな取捨選択していいのかと疑問になるが、あの先輩なら自由勝手に決めてもおかしくない。
「それで結局どうしたんだ？」
「ああ。終夜には悪いが、明日の創造格闘技に出てくれ。明日ちょうど終夜たちが待機だから、代わりにその待機を教師に頼むことになっている。おそろしいのは、その教師の根回しがすでに先輩のほうでついていたってところだ」
要するに湊に組ませておきながら、自分の中である程度振り分けていたということだろう。
すべて命令で指示するより、どんな形であれ自分たちで決めさせることで、ある程度不満をなくすといった方法だ。
いろいろな意味で恐ろしい先輩だった。
「創造格闘技って、なにすんだよ」
「なんか文化祭のイベントでやるものを模擬戦として見せるらしい」
見た目で呼び込もうって腹なのだろうか。
「それっとどこの部活だ？」
「いや、文化祭運営委員会。勧誘と言えば勧誘だけど、文化祭の時に参加者を集めるためらしい」

今からやる気にさせて鍛えさせるという意味があるのだろう。
せっかく参加者が集まっても弱ければ意味がない。
格闘関係の部活は参加するが、一般の参加者は少ない。
一人も出ない年もあるぐらいだ。

「要するに殴られ役なんだろ」

いつものように直球でものを言う大河。
珍しく湊は、大河の直球な物言いに何も言わない。

「それは分からないだろ。相手は分かるのか？」

「確かボクシング部だったたな」

「Ｏｈ．．．」

ボクシング部という名前に、終夜と希は最初にひっ捕らえた副主将を思い出す。
彼らが終夜に対していい感情を持っているわけがなかった。

「そういえば終夜は副主将をひっ捕らえたんだったたな。ボコボコにされないように気をつけろよ」

「サンドバック役でないことを祈ってるよ」

終夜は「返り討ちにしてやる」と言えるほど好戦的でもなく、苦笑いするしかなかった。

「安心してください。そうなったら私、頑張って抗議しますから」

「ありがとう」

希がどのようにして抗議するのか想像もつかなかったが、そうならないことを祈る終夜だった。

第八話　部活勧誘一日目（終）（後書き）

次話から物語が佳境に入ります。

第九話　部活勧誘二日目（創造格闘技）

「彼」は生まれつき“具現化”ができない。
ものを生み出すということが一切できなかった。
だが、“創造”ができないわけではない。
彼は血のおかげか、はたまた運命のいたずらか、創造に長けていた。
小学校に入るころには誰よりも創造に長けていた。
しかし彼は幼かった。頭が悪かったわけではない。
心が幼かったのだ。
無論、年相応の心を持った彼は別に悪くない。
問題があったとすれば、まだ幼かった彼にあれほどの力を与えた“何か”が悪かったのだ。

◇◇◇◇

「しゅうや、今日学校行くの？」

「ん？行くけど」

なぜか心配そうな顔で不可解なことを聞く綾音に、終夜は制服に着替えながら答える。

「なんか、いやなかんじがする」

綾音の第六感なのだろうか、綾音は終夜の服をギュッと握って離れない。
その姿は心配というより怯えているように見えた。
終夜は落ち着かせるように綾音の頭を優しく撫でる。
綾音は今日終夜が創造格闘技に出場するというのを知らない。

それなのに、今日に限ってそんなことを言うのだから無視できるものではない。
だが、だからといって逃げるわけにもいかなかった。

「俺は大丈夫だよ」

「しゅうや、強い？」

その「強い」というのは、肉体のことなのか、精神のことなのか。
どちらにしてもこの場で言う答えは一つしかなかった。

「強い」

綾音を安心させるように力強く言い切る。

「・・・・・・」

綾音がどうしようかと悩んでいるところに家のチャイムが鳴った。
終夜は綾音が服を掴んだ状態のまま玄関を出る。

「みんなどうした？」

訪問者は湊、大河、希、望といつものメンバーだった。

「不動君が今日の模擬戦で緊張してるんじゃないかと思って、リラックスのサポートにきたんだよ」

「違うだろ。相手の情報が分かったから伝えに来たんだよ。希たちとはたまたまそこで会ってな」

「おはようございます」

「おはよー」

大河の冗談に湊の訂正。
小鳥遊姉妹の挨拶に、綾音の怯えの顔が自然となくなってきたが、様子がおかしいのは隠せない。
綾音の異変にいち早く気づいた希が、いつものように膝を落として挨拶をした。

「おはようございます、綾音ちゃん」

「・・・・・・おはよう」

「不動君、綾音ちゃんどうしたの？」

「・・・なんか第六感みたいなものを感じたらしい」

「どういうことだ？」

オカルト的なことが好きなのか、大河が興味深々といった感じで聞いてくる。
いや、オカルト的な話でなくても首を突っ込んでくるか、とどうでもいいことを考えながら説明した。

「どうやら今日俺によくないことが起こると感じたみたいなんだよね」

「第六感か・・・・・・そういうのは意外と重要だからな。それにこの子はよく分からない子だから」

終夜を含め、綾音のことを深く知っている人はこの場にいない。
今までそういうことがなかったとはいえ、ある程度気にしたほうがいいかもしれないと言う湊には、終夜も同意見だった。
「まあ終夜が心配だったら一緒についてくればいいんじゃね？今日は大規模な勧誘だけだから問題ないだろ」
これは大河の提案。
「私もそうしたほうがいいと思います。私がきちんと面倒見ていますから」
希の申し出に終夜は少し迷う。
創造格闘技に出るからだ。
この子にそういう世界はまだ早い気がしていたが、悩む余地などこの時点ですでにない。
自分の服を強く握っている綾音を見て、提案に乗ることにした。
「一緒に学校に来るか？」
「うん」
即答だった。

◇　◇　◇　◇

創造格闘技模擬会場。
部活勧誘をしている生徒以外の全員がここに集まっているのではないかというぐらい、大勢の人で会場が埋められていた。

その中で終夜と希がリングの前で待機している。
終夜と希は大衆の中に溶け込んでいた。
しかし、リングを挟んだ反対側にいるボクシング部の人たち。
明らかに違和感のあるオーラを放っていた。
そのオーラの種類を挙げるとしたら、殺気。
反対側にいた終夜のところにも、その殺気は伝わってきていた。
お互いの姿は見えないまでも、どんな様子か手に取るように分かる。
もっとも、試合のことを気にしていたのは希だけで、終夜は落ち着いている。
希は目に見えて分かるほど、不安でいっぱいといった感じだ。
そんなに弱そうに見えるかなと終夜は軽く落ち込むが、希の心配は別のことだった。

「綾音ちゃん大丈夫？」

自分から面倒をきちんと見ると言ったからか、しきりに希の様子を気にしていた。

「・・・人いっぱい」

そういえば綾音は終夜たち以外の人と面識がなかったと終夜は思い出す。
ただこの場にいるだけでも体力を使うことだろう。

「辛かったらちゃんと言えよ」

終夜の言葉にうなずくも、顔色がよくない。
どうやら人が大勢いるだけが問題ではないらしい。
朝に言っていた第六感みたいなものが関係しているのだろう。

「そろそろリングに行こうかな」
試合時間が早くなるわけではないが、少しでも安心させられるように気が急く終夜。
今回のルールは至極簡単。
想像は身体能力強化のみ。
実践空手はいくつか禁止事項があったが、今回は具現化をしなければ何をしてもよかった。
ちなみに八百長ではないため、本気でやってもいいとのこと。

「怪我をしないように気を付けてください」

殴り合いで怪我をしないようにというのがどれだけ高度なことか。
だが希らしい言葉だった。

「ああ」

終夜は、綾音と希の頭に手をポンと置きながら、これから戦うものとは思えない調子で返事をして、リングに上がる。
リングの上にはすでに対戦者が待ち受けている。
対戦者を見ても、今朝湊の情報で知らされていたため、驚かない。
というより、もともとそんな気がしていた。

「昨日は世話になったな」

相手は槙原浩二。
初日に終夜がひっ捕らえた相手だ。

「本当に対戦者として現れるとは思いませんでしたよ。出てきてもせいぜいアシストぐらいかと」

これは軽い挑発。
彼が禁止されたのは部活動だけ。
文化祭運営委員会は部活動としての活動ではないと思っているのだろうか。
だがたとえ文化祭運営委員会の依頼だとはいえ、ボクシング部としてここにいる以上、部活動と認識される。
カガリはそのことに憤慨していた。
もっとも、怒りをあらわにしているというより、冷たい笑顔で懲らしめてちょうだい、と終夜に言いつけたのだが。

「あの時は不意をつかれたからな。今度はそうはいかない」

不意をついてきたのはむしろそっちじゃないか、と思ったが口に出さない。
先ほど挑発をしたとはいえ、無駄な言い争いはしない。
自分が強い者でも弱い者でも、子供のような言い合いは無様なだけ。
向こうはそんなことを考えてもいないようだが。

「――というわけでお前はぶっ潰す」

何がというわけなのか、まったく話を聞いていなかった終夜は適当に相槌を打った。
そして相手の分析をする。
相手はボクシング部、パンチ主体のスタイルだ。
それにボクシングは実践空手以上に禁止事項が多い。
そこをつけば戦いやすいかもしれないが、油断はできない。
この模擬戦は金的から目つぶしまでありだ。
先入観で挑むと返り討ちにされかねなかった。
そしてダウン中の相手にすら攻撃ありなのだから、危険極まりない。

もっとも今回は模擬戦なので、審判が勝負ありと見極めた時点で終了となる。
だが相手の目を見ると、殺る気まんまんといった感じだった。

「構えろよ」

相手は挑発的なもの言いだ。

「(これはなんでもしてくるな)」

ボクシング部としてここにいるのだからボクシングでくるだろうと淡い期待を抱いていたが、そうもいかないようだ。

『これより、不動終夜VS槙原浩二の創造格闘技模擬戦を始める』

槙原がボクシングスタイルで構えるのに対して終夜の構えは歪だった。
腕はボクシングの構えより低く、足はまるで走るときに構えるスタンディングスタートに酷似していた。
まるでスタートと同時に走り出しそうな構え。
どの武術にも用いられない構えに槙原は警戒する。
槙原は終夜に負けるとは微塵も思っていなかったが、未知な敵に対して反射的に警戒せざるを得ない。
加えて槙原はボクシング試合の時と同じくトランクス一枚なのに対して、終夜はジャージ姿。
格闘技をする時に着る服ではない。そういう意味でも終夜は変に目立っていた。
ちなみにヘッドギアやグローブは両者ともに着用していない。
もちろん両者ともに神(しん)が体中を巡っている。

『始め！』

審判の合図と同時に終夜は飛び出して、拳を放つ。
一撃で仕留める攻撃だ。
だがさすがボクシング部。
終夜のパンチをナックルパートで弾いてもう片方の手で殴り掛かる。
終夜はそのまま体をひねって躱した。
そして躱すと同時に槙原の顎めがけて右足を蹴り上げた。
微妙な態勢ながらも左足の重心がしっかりしている。
これは横腹の筋肉が相当発達していないとできない芸当だ。

「ぐっ」

終夜の蹴り上げが見事槙原の顎に当たり、真上に吹っ飛ぶ。
だが終夜の攻撃は止まらない。
真上に飛ばされた槙原より高く飛び上がり、そのまま槙原めがけて拳を振り下ろした。
リングが揺れるほどの轟音をたてて、槙原が地面に激突する。
ここまで試合開始からわずか１０秒だった。
参加者勧誘に対して行っている模擬戦にしては早すぎるタイムだ。
別に終夜は試合を長引かせるようにと頼まれてはいなかったが、当初はある程度応酬を繰り返すつもりだった。
しかし、綾音の心配を少しでも早くなくしてあげるために、短期に決着をつけたのだ。
だが終夜は、何もできなかったと言ってもいい槙原に少しばかり同情する。
副主将としても鷹左右学園の生徒としても、あまりにもかわいそうな結果だった。

「最悪な部活勧誘になってしまったな。仕方がないとはいえすいま

せん」

終夜はすでに意識を失っている槙原に軽く頭を下げた。
身体、創造と共に鍛えていたボクシング部副主将をたった二撃で沈めた終夜の神の密度は計り知れないものだ。
しばらく硬直していた審判が槙原の状態を確認すべく、近づく。

『し、勝者、不動終夜！』

観客が呆気にとられている中、審判の声だけが会場に響いた。

「そういえばまた目立っちまった。まあ今さらだな」

これでこの学園で終夜のことを知らない人はいなくなったかもしれない。

「不動くーん」

聞き覚えのある元気な声の方向へ振り向くと、望と大河の姿が見える。
よく見ると、湊とカガリも観客の中に交じっていた。
サボり、といえばサボりになるが、今ほぼ全校生徒がこの場所に集まっていることを考えると、見回りもあまり意味がない。
終夜はそれぞれの位置に手を振り、最後に綾音を見る。
終夜が無傷で勝利したというのに、その顔は未だに怯えている。
朝以上に、尋常でないほど情緒不安定な状態だった。

「綾音大丈夫か！」

あまりにもおかしい様子の綾音に、終夜は声を荒げて問う。

よく見ると、綾音の口元がわずかに動いている。

「（ま・だ・・・う・し・ろ・に・こ・・・わ・い・も・・・の・が・・・・・・・・・）」

かろうじて動かしている唇を終夜が懸命に読み取ろうとしている間に、不穏な空気が会場を覆った。

「不動さん！？」

希が真っ青な顔で終夜の後ろを指さして叫ぶ。
終夜も気づいて先ほど気絶していたはずの槙原を見る・・・・・・ことができなかった。

「がはっ」

振り向く前に頭に強い衝撃がきた。
あまりにも強い勢いに終夜はリングの端まで吹っ飛ばされる。

「な、なんだ？」

頭に衝撃がきたことで視界が揺れる中、なんとか正面を向いて衝撃の原因を見る。
そこには先ほど気絶していたはずの槙原が立っていた。
その目はあきらかに意識を保っていない。
あれは操られているというより、本能のまま動いているというほうが近かった。
槙原は無言。だが、負のオーラはどんどん強くなっている。

「しゅうや、逃げて！」

聞いたことのない口調で綾音は終夜に向かって叫ぶ。
だが終夜は槙原に向かって走り出した。

「しゅうや！」

「こいつをこのままにはしておけない」

綾音の制止を振り切って走り出す。
槙原は今や殺人マシーンと同義だ。
槙原の右手にありえないほどの神(しん)が流れているのを終夜は感じていた。
あれで殴られたら、並大抵の防御では防御ごと体を貫かれる。
ただ、すべての神が右手に集中しているからか、右手以外には神が流れていなかった。
終夜は一撃で仕留められると確信して、後ろ首に肘を叩きつけた。
後遺症が残るかもしれなかったが、仕方がない。
あの神の溜め方は尋常ではなかった。
高位な創造主なら止めることができても、あの腕を一振りでもさせたら被害は免れない。

「だが分からないな。この人がどれだけ集めてもあんな量の神があるとは——」

言いかけたところで止まる。
終夜は開いた口が塞がらなかった。
目の前にありえない光景を見たからだ。

「・・・・・・」

槙原が立ち上がったのだ。

「ありえない。いくら本能のまま動いていたとしても、体が言うことを聞かないはずだ」

終夜が与えた攻撃は、脳に直接響くほどの打撃。
最低でも身体がマヒ状態を起こしているはずだった。
可能性としては、体が何者かに操られている場合だが、あの動きはどう見ても操られている動きではない。
そんなことを終夜が分析している間に、槙原が動く。
先ほどと同じく右手に神を溜めて地面を叩く。
衝撃でリングが壊された。
観客の中でなんとか反応できた者は、創造で防御するも、全員が無傷となるわけではない。
何人かはこれでリングの破片、衝撃からを防御できたが、槙原の攻撃はまだ続いた。
リングの破片を終夜めがけて蹴り飛ばす。
終夜はそれをはじく・・・・・・が、いつのまにか終夜の目の前に移動していた槙原が大きく神を溜めた右手で、終夜の胴体めがけて叩きこんだ。

「不動さん!?」

「おいおい、あれはやばいぜ」

希と綾音を守るために、湊と大河、望が希と綾音のところまで駆けつけていた。

「いや、あの程度なら終夜は反応できたはずだ」

終夜のことを一番よく知ってる湊が安心させるように言うが、終夜が起き上がる気配はない。

「でもあの人、また右手を振り上げてるよ」

望の言うとおり、終夜をさらに叩き潰すために槙原が拳を振り上げている。

「こっちだっ」

標的を終夜から外すために大河がビー玉をはじいて槙原に飛ばす。
放たれたビー玉が槙原の額に当たるも、槙原は怯まない。
それを見た希と望が意を決して、手を繋ぐ。
だがそれよりも早く、槙原は拳を振り上げたまま希の前に飛び降りた。
槙原は躊躇なくそのまま拳を振り下ろす。

「2人とも下がれ！」

近くにいる希と綾音を助けるために、大量のビー玉を握った大河が前に出て拳を止める。
だが力が一瞬拮抗するも、弾き飛ばされた。

「いたっ！！」

「・・・・・っ！」

衝撃で飛んだ地面の破片が当たったのか、希と綾音の足が切れて血が流れる。
湊も体を傷つけているが、重症ではなさそうだ。

今までフリーズしていた観客が槙原を止めるべく、創造の使用に取り掛かり始める。
だがそれよりも早く、リングのあった場所から何者かが希と綾音の前に飛び降りた。

「不動さん・・・・・・」

「しゅうや、だめ」

リングから飛び降りたのは頭から血を流した終夜だった。
しかしいつもと違い、誰でも分かるほど殺気をダダ漏れにしながら終夜は槙原を見る。

「まさかぁあいつ・・・」

湊が指揮棒片手に創造で終夜を止めにかかる。
そこに終夜の殺気が湊に纏わりついた。
湊は得体のしれない恐怖で指先一つ動かせない。
そんな湊を見ることもなく、血をポタポタと流しながら終夜は手を前に突き出し、ちょうど指を鳴らすような態勢になる。
パチンッ、と指が鳴る音と同時に起き上がりかけた槙原の身体が揺れる。
さらに連続で指を鳴らし続け、槙原の身体が連続で揺さぶられる。
槙原の身体は数回の攻撃ですでにボロボロだった。
肌は赤紫色になり、ところどころ折れているかもしれない。
希と望は繋いでいた手を放して、顔を覆っているほどだ。
それでも終夜はおかまいなく、最後に一発、大量の神が終夜の突き出した指先に溜めてとどめを刺そうとする。
先ほどの槙原の右腕に近いほどの膨大な量だ。

「もうやめろ、終夜。これ以上攻撃する必要はない。お前が綾音ちゃんを怯えさせてどうするんだ」

指をならしかけたところで、湊が止めに入った。

諭すような静かな声。

しかし湊の終夜の腕を掴む手は、力強く握られている。

先ほどの得体のしれない恐怖が湊から槙原に移ったからでもあったが、それ以外にも「親友」として止めることができたのだろう。

すでに槙原は完全に行動不能になっている。

「綾音の恐怖の元は俺だったたんだな」

湊の声で正気に戻った終夜は、悲しげな声でポツリとつぶやた。

第九話　部活勧誘二日目（創造格闘技）（後書き）

昨日は諸事情により投稿できませんでした。
明日は午前１１時ごろに投稿する予定です。

第十話　不動という名の家系

「くくく、はっはっはっ！！」

ワインの入ったグラスを片手に、けたたましく笑い声をあげる謎の研究者。

周りはいつものことだからなのか、すました顔で待機している。

しかしその姿は、物騒なことこの上なく完全武装。

この部屋に入った途端蜂の巣にされるだろう。

「こいつは素晴らしい。やはり最高傑作だ。私としたことが気付かなかったとは、この顔！この表情！あの頃とそっくりじゃないか！」

興奮のし過ぎで、グラスの中のワインが零れ落ちる。

そのまま空になったグラスを投げ捨て、喜びを体全体で表現する。

投げられたグラスに見向きもしない完全武装者は、よく訓練されているといってもいいだろう。

「そうかそうか。だが・・・・・・これだけでは『どれ』だか分らんな」

大げさな興奮をする分、冷めるのが早いらしく、自分が投げて割ったグラスを律儀にちりとりと箒で片付けながら、思案顔に戻る。

静かにジッと考えている姿は、見る人が見たらカッコいいかもしれない。

だが中身は最悪だ。

「やはり私は科学者に向いていないのかもしれんな。体が疼いて仕方がない・・・・・・・私が直々に出向くとするか」

にやりと歯を?き出しにして笑うその姿は、まるで幼い子供が悪だくみを考え付いた時にそっくりだった。

◇　◇　◇　◇　◇

創造格闘技模擬戦騒動から二時間。

あれから槙原は完全に沈黙し、病院に搬送された。

創造の技術を使用しても完治までは二カ月かかるほど、容体は酷かった（今の時代では長いほうになる）。

複数の箇所に内出血、一部では粉砕骨折にもなっていた。

創造を使った治療は、二つある。

一つは複数の人間が対称の人間一人の構造を把握し、要所要所を補う儀式創造（リチュアル・クリエイト）という方法。

もう一つは治療者本人が創造によって自己回復する方法。

厳密には治療者の神を使って医者が治療を促す方法だ。

人の身体の中にある神は、人それぞれ違う。

自分の神を人に流すことができない代わりに、その神は自分の一部ともなるので、治療の促進につなげることができる。

もっとも、これも他者の力が必須であり、人体の構造に詳しい人がサポートしなければならない。

複数の内出血に粉砕骨折とはいえ、儀式創造（リチュアル・クリエイト）はそう簡単にしてもらうことはできない。

複数の人間が集まればいいという問題ではないからである。

なので槙原の治療には本人の創造が必要であった。

もちろん現代の医学で治療することも可能だが、時間がかかり、何かしらの後遺症が残る可能性もある。

そのため、創造での治療が必須なのだが、槙原は現在意識不明。

たとえ意識が回復しても、創造が使えるほど回復するまでには時間がかかる。

「そうか」

湊から槙原の容体を聞いた終夜は一言つぶやくだけ。
傍らでは綾音が眠っている。
あの後終夜は気絶したため、保健室に担ぎ込まれた。
もっともたいした怪我は負っていなかったので、包帯を頭に巻いた程度だ。
暴走した槙原の一撃もきちんと創造で緩和していたようだ。

「せっかく見直されたお前の評価もガタ落ちだな」

「はは、そうかもな」

いつものからかいに湊は怒らない。
大河の勢いもどこか静かだった。
希と望は何を言ったらいいのか分からないといった様子で静観している。
聞きたいことはいっぱいあった。
それでも重い口が開かない。
そんな様子を見た終夜が重い思いを振り切って口を開く。

「まあ俺が怖いと思うのはしかた――」

「そんなことありませんっ」

終夜の言葉を吹き飛ばすほどの勢いで希が叫んだ。
寝ている綾音の身体がピクッとする。
その目は終夜が思う以上に真剣だった。
無理をしている目ではない。

望を見ても同じ目をしていた。
「ありがとう。ならまあ、話してもいいかな」
暗い雰囲気を一転させるような明るい声。
だがそんな終夜を湊が止める。
「終夜！」
「別にいいだろ。お前の時もこんなんだったろ？」
終夜が諌めるが、湊の心配は別だった。
「希と望はかまわない。だが大河は考える必要がある」
「えー、俺にも教えろよ〜」
「お前のそういうところがだな」
「まあ湊。湊も見ただろ。大河があの時どうだったのか」
「それは・・・まあそうだが」
あの時の大河はとっさに終夜を守るためにビー玉を飛ばし、常に希たちを守る態勢にあった。
しかも自分の力が槙原に通じないと理解した上でだ。
普段は適当なやつでもやるときはやる男だと終夜も湊も感じている。
初対面の時の印象が悪かっただけで、今はそんな印象を毛ほども持っていなかった。
ただ湊は理解していても感情がそれを許せなかった。

何事にも性格の相性はある。

「じゃあ俺が一番聞いてほしいことから話そうか」

希と望はもちろん、大河ですら真剣な表情になる。

その様子に湊も素直に静観することを選んだ。

「俺には自分でも抑えきれない殺人衝動がある」

皆からしたら衝撃の告白。

だが終夜自身はさして深刻ではないかのように明るい調子で話す。

「“血”なんだけどね」

「血？それって家系ぐるみってことか？」

「ああ。どうやら殺人衝動は俺の家系の性(さが)らしい。まあスイッチは人によって違うみたいなんだけど」

「不動君のスイッチってなんなの？」

「分からない」

「分かんねえのかよ」

「ああ。いつもなぜか気づいたらなってたな」

「自分で制御できないだけでなく、発動条件も分からないのが余計性質悪いということか」

殺人衝動と言っても一般の理解している殺人衝動とは少しずれている。
無差別に人を襲うことはしない。
それに加え、終夜自身殺したいと思っているわけではなかった。
実際は意識がほとんど飛んでいるため核心はなかったのだが。

「家系ってことはほとんど親の情報か」

「ああ、まあ、そんな感じ」

「歯切れの悪い言い方だね」

「・・・なんか望って大河に似てきてないか？」

どんどんツッコんでくるあたり。

「そうかなあ」

「まあとにかく、この衝動が起きるのは今では俺と親父だけなんだけど、親父は詳しく教えてくれないんだよ」

「なんだそれ。言わないことに何か意味があんのか？」

「さあ。お前もいずれ克服できるって言うんだよなあ」

「親父さんは克服できたのか！？それは初耳だぞ」

今までじっと黙っていた湊が眼をカッと開いて声を荒げる。
終夜はその様子に驚きつつも、明るい態度を崩さない。

「湊に言ってなかったっけ？　そんなに声を荒げるなよ」
「あ、あぁすまん」
「だけど克服した後に一回だけ衝動が起きたみたいなんだよな。俺が初めて衝動が起きたときらしいんだけど」
「それも初耳だぞ」
ジト目で言う湊を、今度はスルーする。
「まあでもかなり小さい時だから記憶にないけどな。家族で出かけたときらしいけど」
そんな時、おずおずと希が手を挙げた。
終夜は頭を掻いて全く覚えていないというのを主張する。
「たぶんですけど、終夜さんに命の危険が起きたときになるのではないでしょうか」
皆がそれだ！　という表情をするが、終夜の答えは微妙なものだった。
「俺もそうだと思ったんだけど、それを言った時の親父の表情がなあ」
ものすごく微妙な顔をしていたのを覚えていた。
当たらずも遠からずとでも言うべきか。
人によってはスイッチが違うということだから、親父がそうでないだけで、終夜はそうなのかもしれない。
それでも確信していることが一つだけあった。

「まあ必須条件の一つは本気の殺意だと思う。今までに何回か死にかけたことがあったけど、衝動が起きないことも多かったからな」

「そ、そんなに死にかけたことがあるんですか？」

「あ、違う違う。事故とかしょうもないことだよ」

終夜は慌てて言い繕う。

事故がしょうもないとは思っていなかったが、あのような殺意を持った相手に襲われることが頻繁になかったことを希は本気で安心したようで、その様子を見た終夜は余計なことで希に心配かけたことを反省した。

「そろそろいいだろ。終夜がこう言っているとはいえ、人のことを根掘り葉掘り聞くもんじゃない」

湊が手を叩いて話を終わらせようとする。

「お前がそれを言うか？」

「なんか言ったか？」

「なんでもありません」

長年の友、終夜と湊の関係は誰が見てもそう見える関係だった。高校を卒業してからもいつまでもこの調子なんだろうなと思える。終夜自身、そう思っていた。

「そうだな。じゃあそろそろ帰るか。俺たちは先に行ってるから綾

音ちゃんを起こすなりおぶるなりして早く来いよ」
終夜の怪我は極めて軽傷なため、入院するほどではなかった。
まだ心配そうな表情をしている希、いつもの元気がない望を大河が病室から出るように促した。
終夜と湊と綾音だけになってから、先ほどまでとは違う雰囲気で湊が口を開く。

「よくもまあ、あんなに明るく言えたものだな」

今までにこやかだった終夜の表情が、湊の言葉で表情を落とす。

「ばれてた、か」

「当然だ。今回話したことが核心に触れてないだけで、根本は『あれ』に繋がるんだからな。正直見ていて痛々しかったぞ。それにいくらなんでも話すのが早すぎたんじゃないのか？」

彼らと出会ってからまだ二週間ほどしか経っていない。
普通の人が聞いたら怖がられる、いや、それ以上のことを思われても仕方がないことを話した。
だが、終夜は後悔していない。
湊自信、結果的に間違ってはいなかったと思っている。
湊は頭や身体で理解していても感情が許さないことが多い。
極めて合理的な感情を持つ。

「ここで話さなかったら微妙な空気が続いていただろうからな。話した結果理解してもらうか、きっぱり嫌われた方がいいだろ？」

「この子はどうするんだ？」

湊の視線の先には綾音がいる。

「大丈夫だよ・・・・・・それより」

優しい表情で綾音を見ていた終夜が一転、意地悪そうな笑みで湊を見る。

「なんだ？」

「大河には感謝しなくちゃな」

「っ！」

本当に感謝しているのはもちろん終夜のほうだ。
だが湊も大河の行動を認めざるを得ない。

「ぶっちゃけ、今回大河がいなかったらかなりやばかったと思うぞ。不確定媒体のあいつが身を挺したんだからな」

とっさに動けなかった湊の代わりに大河が臆することなく、槙原を挑発し、一撃を弾いたのだから。

「ま、まあそうだな」

視線を逸らす湊を見た終夜は軽く笑う。

「あいつはかなり強くなると思うぞ。なんたって５０％の力であの一撃を防いだんだからな。不確定媒体なのが本当におしいよ」

不確定媒体というのは一種の精神病に近い。
人によって症状は様々だが、共通しているのは媒体が「見つからない」のではなく、「見つけたくない」、「認めたくない」というものだ。
いつも明るい大河も、実際はかなりキツイ状態なのだ。

「それよりそろそろ行くぞ。綾音ちゃんをちゃんとおぶってやれよ」

大河の話を早く切り上げたいがために湊はそうそうに部屋を出ようとする。

「おいおい、怪我人にさせんのかよ」

「綾音ちゃんはお前の保護者だろ？」

湊はフッと笑って退出する。
病室がしんとなった。
2人だけになった終夜は綾音の頭をそっと撫でる。

「もう嘘寝しなくていいよ」

「・・・・・・」

「寝息。いつもそうだし、さっきまで可愛い寝息を立てていたのに、今は静かだぞ」

あくまで優しい口調。
ちょっとガラじゃないかなと思いつつ、頭を撫で続ける。

「・・・ごめんなさい」

起き上がった綾音の開口一番が謝罪だった。

「どうして謝るんだ？」

「綾音、聞いちゃいけないこと聞いちゃった」

「綾音が聞いちゃいけないなんてことはないぞ。俺があいつらに話したのは大切な友達だからだ。綾音もあいつらと同じ俺にとって大切な人なんだから」

「綾音が大切？」

「ああ」

「・・・そっか」

穢れのない笑顔とはこのことを言うのだろう。
綾音の笑顔につられて、終夜も自然と頬が緩んだ。

◇◇◇◇

「結局不動君の創造については分からなかったね」

終夜と湊と別れた後の帰り道、望が大河と姉である希に対して一言漏らす。
小鳥遊家と柊家は意外と近いから帰り道もギリギリまで一緒だ。
「まああれだけでもかなりキツイからな。終夜の気持ちも察してやれ」

湊みたいなことを言う大河を気味悪く思いながら、望は我が姉を見つめた。
「お姉ちゃんはどうなの？」
「どうって・・・・・・」
「不動君のこともっと知りたい？」
「わ、わたしは・・・その、知りたいですけど・・・」
「不動君の気持ちを優先する、でしょ？」
「望はお姉ちゃんのことをよく御存じで」
「当然でしょ柊君。ボクたちは姉妹なんだから」
「そうだったな。でも望は男に見えなくもないから姉弟でも通じるよな」
「ボ、ボクは女の子だよっ」
こんな馬鹿話を続けられる関係。
ここにいる人全員、そんな関係がずっと続けばいいと思っていた。
もちろんそこには終夜と湊も含まれている。
「ま、あいつの家系がどうであれ、俺たちが気にすることじゃないぜ」

「そうですね。お互いが助け合える存在であれば、どんな時でも大丈夫だと思います」

希と望の関係のことを指しているのだろうか。

希らしい凛とした表情で言い切る。

「こんな美女に恵まれて終夜は幸せ者だな。あ、一人は男の子だっけか」

「ボクは女の子！」

新しいからかいを発見した大河は、場を和ませるためか、しばらくこのネタで望をいじり続けた。

第十話　不動という名の家系（後書き）

おそらく明日は投稿できません。
明々後日までには必ず投稿致します。

第十一話　反創造テロ組織

「さて、どうする？」

言葉を発したのは湊のほう。
終夜はじっと座って考えている。

「あの先輩の言うことだから、な。鵜呑みにしにくいところだが、現に不可解なことが起きているのも事実」

先輩というのはお助け部部長のカガリのこと。
部活勧誘最終日、創造格闘技模擬戦事件の翌日。
いつものように学園に登校した終夜を待ち受けていたのは、疑惑と疑問と恐怖だった。
疑惑は、あれは本物の終夜だったのか。またはこいつは本物なのか。
疑問は、あの槙原の様子はなんだったのか。
恐怖は、本気の殺意があった終夜に対する感情。
わざわざ大河たちが気を遣って一緒に登校してくれなかったら心が折れていたかもしれない。
注目を浴びるのが好きではない終夜にとっては、いろんな意味で苦痛になる。
もっとも、実際は湊、希、望、大河が一緒にいたからたいしたダメージにはならなかった。
皆と知り合えたのはただの偶然。
でも偶然の一言でおさまる出来事ではない。
偶然を引き起こした必然の出来事に感謝だった。
そして問題は、朝の打ち合わせの時に起きた。

「昨日の一部始終は見ていたわ」

この場にいるのは終夜と湊だけ。
他は見回りに出ている。
「なぜ暴走した槙原先輩を鎮めるのに協力しなかったんですか？」
もっともな疑問。
もしカガリが駆けつけていたら終夜は衝動を起こさなかったかもしれない。
「あら、そういう仕事は若い子の役目でしょ」
「怪我人が出るところだったんですよ！」
「やめておけ湊」
カガリに何を言っても無意味。
頭では理解していても感情が許せない湊を諌めたのは終夜。
「でも様子を見ていたのは私だけじゃなかったわよ」
終夜はこの事実を予想していた。
実際あの時、終夜は意識を失っていたため周りの様子を覚えていない。
だが、一般人が手を出せなかったのは分からないことではないが、力ある生徒が手を出さなかった理由には想像がついた。
おそらく自分がどう動くのか見ていたかったのだ、と。
「それよりそろそろ本題に入るわ。今回の事件、本来なら収束部が事態の収拾を図るものだけど、今収束部員はほとんどいない状態。

かといって魔法使い（ウィザード）級に頼める理由もない。だから
あなたたちにお願いしたいのよ」
終夜はカガリの一字一句を取りこぼさないように静かに聞く。
その様子を見て、カガリは言葉を続けた。
「私が独自に調べた結果、槙原浩二には薬を使った疑いがあるみたいだわ。ただ問題はその薬の出所なのよ」
創造の技術が使われるようになってから、麻薬のような非合法な薬が出回ることは少なくなった。
創造で自分の夢が実現しやすくなったからだ。
夢と言っても様々だが、当初は可能性が広がるという事実だけでも十分であった。
しかしそれも長くは続かない。
人間は一つ何かを成し遂げてもそこで止まることはできない。
創造が使えるようになっても、少し時が経てばもっと上を求めたくなる。
これは人間の性(さが)と言ってもいい。
やがて非合法な薬の中身が創造の強化。神(しん)の増量へと変わっていった。
しかし神(しん)とは人間の生命力と言ってもいい。
生命力を急激に増やすことなどできるわけがない。
薬は擬似的にそれを可能にさせていると思い込ませるものなのだ。
「けっこう大きな組織の可能性がある、ということですよね」
「ふふ、頭の良い子は好きよ。その通りね」
個人で買い占めて販売する人がいないわけではない。

だが、今の世の中それをやるとたいてい捕まる。リスクが大きすぎるため、可能性は低い。
それにそう思う最大の理由は彼、槙原浩二にある。

「俺もそう思います。薬に手を出す理由の一つとして、創造に自信がないというのが主です。ですが、彼は自分が俺に負けると微塵も思ってはいませんでした」

ゆえに組織の関与。
何かの実験なのか、学園の評判を落とすことが目的なのか、誰かが槙原に気づかれないように薬を投与した可能性が高い。
愉快犯でなければ理由がそれぐらいしか思いつかない。
そしてその理由だと、個人ではなく、組織での行動のほうが納得できた。

「そういうこと。しかも少し厄介な組織かもしれないのよ。いや、厄介な組織と繋がっていると言ったほうがいいわね」

「・・・・・・」

カガリは一言一言を終夜の表情を確認するためなのか、ゆっくりと話す。
終夜は目で先を促した。

「反創造テロ組織」

「っ！！」

カガリの放った単語が終夜の頭を駆け巡る。
カガリが言った反創造テロ組織。

湊もよく知る、終夜の因縁の相手だった。
反創造テロ組織、というと、創造の不得手な人間の集まりと感じる名に聞こえるが、実際はそうではない。
組織をまとめあげているのは、創造に長けていると言ってもいい人物。
ではなぜ反創造などと言われているのかというと、従っている者が創造に対して何かしらのマイナス感情を持っているからだ。
彼らは創造を本気で失くそうと考えている。
そのため表向きの行動は創造そのものに対して反発しているように見せかけているが、実際は違う。
組織を占めている創造に長けている者がそのマイナス感情を利用しているだけにすぎない。
本当の目的はまだ判明していない。
うまく下っ端の想いを利用しているためカモフラージュされているのだ。
もちろん下っ端も馬鹿ではない。
上層部が自分たちを利用しているのは気づいているだろう。
それでも、自分たちの悲願を達成させるには彼らの力が必要。
お互いにそれぞれの目的を胸に抱えながら、利用し合っているといった状態だ。
「なるほど、それで一介の学生に話すことではないことを俺たちに話したのですね」
「なんのことかしら？　私は私自身の恨みを晴らすためにあなたたちに協力してもらおうと思ったんだけど」
いろいろな感情が混ざり合っている状態の終夜の代わりに湊が言うが、カガリはあくまで本意を話すつもりはないようだ。

「いいでしょう。その依頼、俺が引き受けます」

「もう少しよく考えたらどうだ？」

「考えた結果、引き受けないと俺が答えると思うか？お前なら分かるだろう。やつらは俺の人生を変えたんだ」

怒りを押し殺そうと話しているが押し殺せていない。
湊はその迫力に押されたわけではなく、自分の言ったことが無意味なことだったと認めたから黙りこくる。
そのまま終夜は負の感情をあらわにしながらカガリに言った。

「俺は先輩に怒っていると同時に感謝もしているんですよ。最初の部活のスケット、部活勧誘初日の複数資料に部活の名前がそれぞれ書かれていたこと。すべてあなたがいろいろと根回しをした結果ですよね。おそらく最初から収束部の真似事をさせるつもりだったのではなく、この組織に関わらせることが目的だった」

「ふふふ」

カガリの行動理由を推理して突き付けるが、本人はただ微笑むだけ。
是とも非とも答えないが、終夜はそれを肯定と受け取った。

「待て待て。お前一人でやるつもりか？」

「・・・俺一人でやる、と言いたいところだけど、俺だけでは限界がある。湊一人ぐらいならかまわないだろ」

「ふっ、言ってくれるな」

冷静さは湊。
分析力は終夜。
終夜が盲目している部分を湊の冷静さで終夜の分析を補う。
これが彼らのスタイルだ。

「あなたたちの関係は羨ましいわね。そんな組み合わせ、そうそう巡り合えるものじゃないわ。お互いを大切になさい」

先輩らしい助言。
それに対する終夜と湊の反応は普通。

「人に言われて気づくような関係ではないですよ」

「自然。どう思っていてもそのスタンスは変わりません」

◇　◇　◇　◇　◇

カガリに啖呵を切っておきながら、いざ冷静に考えると危険な賭けであることには変わりない。
組織そのものに近づくことはもちろん、カガリが組織と繋がっていないとも限らない。
収束部の権利を持っている自分たちがいた部活勧誘時に、騒ぎを起こした罰を与えたいと、カガリらしい理由を述べてはいたが完全に信じられるものではない。

「ま、でも結局やらないと答えるわけがない、だろ？」

「正解」

「だが大河たちには言わなくていいのか？」

「それこそ愚問だろ。あいつらには関係のないことだ。というより、死の危険があることに大切な友人を巻き込むわけにはいかないよ」

この場で俺は大切な友人ではないのか？と言う湊ではない。

終夜の言葉にそれで済めばいいが、と思っただけだった。

「それより今からすぐに行くか？」

カガリから与えられた情報は一つだけ。

元反テロ組織に所属していた者の居場所。

それ以上の情報はさすがに分からないということだろう。

「他にあてはないからな」

「了解。それにしても結局俺のやったことは単に疲れただけだったな」

カガリと組んだことを言っているのだろう。

「そういえば二日目はどうだったんだ？」

「・・・あの人が真面目に巡回なんてしてたと思うか？」

「いや、そう言われても・・・」

やる時はやる人かななんて思っていた終夜は言葉に詰まる。

「部活勧誘の指導をしてたよ。声が小さいだとか、もっと気持ちを込めてとか言ってたな」

「・・・・・・行こうか」

「・・・・・・そうだな」

目的の場所は学園からそれなりに遠いが、タクシーで行けばそんなにかからない。
タクシーを見つけて目的地に着くまで、お互い無言だった。

◇◇◇◇

バー『ソテリア』。
目的の人間は、よくここに入り浸っているらしい。

「ソテリア、か」

「変な名前だな」

「本人たちは真剣なんだろうよ」

終夜と湊は古臭い外観の店へと入っていく。
中身は外観と違って、それなりに洒落た店だった。
中にはマスターの他にちらほらと客がいる。

「あいつじゃないのか？」

「・・・・・・」

カガリの情報だと、対象はずいぶんな小柄だとのこと。
ずいぶんと限定された情報だが、見るからに小柄な人間がカウンタ

ーに座っていた。
マスターが大柄なのでよく目立つ。
「ちょっといいですか？」
無言な終夜の代わりに湊が尋ねる。
年齢は２０代前半といったところだろうか。
ピアスとネックレスに柄物のシャツ。
「なんでしょう？」
風貌の悪い不良のようなみてくれのわりに落ち着いた口調。
「お聞きしたいことがあるのですが」
「もしかして俺の昔のことについてか？」
「はい」
カガリの情報は当たりだったと湊は安堵する。
男はマスターに注がれたワインを飲んで少しにやけた。
「隣どうぞ」
「失礼します」
男に勧められて終夜と湊は座る。
その時に酒を勧められるが、丁重にお断りして男が口を開くのを待った。

「理由を聞いてもいいかな？」

もっともな疑問。
当然こちらに拒否する権利はない。
その疑問に終夜が湊の代わりに答えた。

「俺たちの学園にその組織が喧嘩を売ってきました。俺らはやつらをぶっ潰すためにあなたに話を聞きにきたんです」

終夜はものすごく失礼な口調で簡潔に答える。
礼儀も何もあったものではない。

「ずいぶんと失礼な言い方ですね。僕がなぜ抜け出したのかとか考えないのですか？」

それなりに大規模な組織を抜け出すことがどれだけリスクの高いことだろうか。
抜け出せた後も一生と言っていいほど命の危険がつきまとう。
その理由を考えると、他人に情報を流すことを避けたいと思うのは当然のことだ。

「おい終夜」

終夜は湊の呼びかけをスルーして立ち上がる。
そのまま店の中心あたりまで歩いた。

「もうやめない？こんな小芝居」

「・・・・・・」

「あんたら殺気ダダ漏れ。バカにされているのかと思いましたよ。だいたい組織を抜け出したってところからしておかしい。宗教じみた組織にいる人間が逃げ出そうなんて考えるわけないでしょ。それと店の名前。隠す気あんの？」

相手を見下した言い方をして挑発する。
終夜の顔は無表情。
対して相手は笑顔が張り付いていた。

「名前ってどういうことだ？」

「ｓｏｔｅｒｉａ・・・・・・ギリシア語で『救済』って意味だ。湊、俺たちが探している組織の名前知ってるか？」

「・・・・・・」

「『グノーシス』・・・・・・人間本来がなんなのか知っている。我々は神の存在を認識している。神がきっと自分たちを救済してくれる。まあそんなところだろう。狂った組織にはよくある宗教の真似事だ」

創造とは神の技術に等しい。
だから人間が創造を使うということは、神の存在を否定することになる。
この世を創ったのは神だと思われている中、創りだすというのは神の専売特許だと思っていたところに、人間が神の技術を使ったのだ。
そうなると、世を創りだしたのは人間ということになる。
結果、神はこの世に存在しない。
テロ組織「グノーシス」とは、神の存在を信じる者が神を取り戻し、本来の人間に戻ろうと奮起する組織なのだ。

組織を占めている人間が実際どう思っているのかは不明だが、似たようなことをしているのは間違いないだろう。

「最初は創造が下手くそなのがきっかけでも、それがだんだん、神がいないから、創造に長けている人間のほうがおかしいと思い込む。そうしないと生きていけないんだろうね」

「黙れ！」

グノーシスの組織からしたら、終夜の言葉はまさに凶器。自分たちの心のよりどころを否定され、神でさえも否定される。気づけば店の客全員が終夜を囲んでいた。

「お前に何が分かる！我々は崇高な目的のために動いている。知ったような口を聞くな！」

先ほどまでの落ち着いていた仮面が外される。終夜はあくまで無表情。男たちからしたらこの無表情が余計気にくわない。

「だけどお前たちがやっていることはなんだ？薬を流し、必要なら人を殺す。それにお前たちが今ここにいることそれ自体が神もへったくれもあったもんじゃない。わざと偽情報を流して敵をおびき寄せ、袋叩き。違うか？」

「俺たちがやっていることは神を救うことだ。結果神が救われるなら俺たちの罪は罪ではない。それに俺たちがここにいる理由はもう一つある。勧誘だよ。たまに組織に入りたいと言うやつがいるからな」

「おっと。俺はくだらない宗教勧誘をされるところだったのか」

終夜のこの一言が限界だった。

「き、貴様あ！！」

ついに男がキレて殴り掛かってくる。
いつのまにかバットやメリケンサック等をかまえていた周りの男たちも終夜を襲う。
それに対して終夜が取った行動は至極簡単なことだった。
目を瞑り、ジッと立っているだけ。
終夜の後ろから強風が起き、終夜を中心に軽い竜巻が発生した。
身体能力強化を一切していない男たちは、それぞれ壁に叩きつけられる。

「ぐあっ。な、何が起きたんだ」

「やっぱりこの程度じゃ殺人衝動のスイッチは入らないか」

衝動に任せて恨みを晴らしたい。湊にはそう聞こえていた。
それが本気かどうかは分からないが、少なくともこのふざけた口調をしている終夜は、因縁の一部を前にしてキレていた。
終夜は最初の男に近づきながら問う。

「組織『グノーシス』について話すことある？」

◇　◇　◇　◇　◇

「意外と簡単に吐いたな」

神をほんとうに崇めている人に、組織の情報を漏らす奴はいないだろうと思っていた湊は、少し拍子抜けしていた。

「あんな真似事をしている奴らだからな。結局奴らにとって、信仰心そのものが神のようなものだったんだよ」

きっかけは創造ができなくて社会から虐げられていたから。

そこで神に深く信仰することで、今の自分が正しいと今の世から逃げていただけにすぎないということだ。

「それにしてもお前の言動が理解できないわけではないけど、けっこう驚いたぞ。それにもし奴らが吐かなかったらどうしてたんだ？」

「そん時は先輩の元へ連れてくだけだよ」

今ではずいぶんと冷静な終夜は、あっけからんと言った。

「・・・・・・お前の本当の顔が分からなくなってきたよ」

「人間は誰でも複数の顔を持っているもんだよ。だけどたいていはいくつかの顔を表に出さないだけ。だからどれも俺の顔だ」

複雑な表情をする湊に、終夜は笑いながらビンを渡す。

「さっきかっぱらってきた。中身はジュースだよ」

二つの戦利品を手に、軽口を叩きながら学園に戻った。

第十一話　反創造テロ組織（後書き）

更新が不定期になります。第一章は早めに投稿し終えるつもりです。

第十二話　終夜の過去　CHAPTER1

「思いがけないところに暇ができたな」

まだ綾音が寝ている時間の日曜日の朝。
昨日反テロ組織「グノーシス」の情報を一通りカガリに話したとき、終夜はすぐ攻めに行くものだと思っていた。

「相手は腐っても巨大な組織。準備もなしに攻め入るなんて自殺行為よ」

カガリの言っていることは正しい。
創造に長けていると言っても具現化ができない終夜に、平均よりちょいできるぐらいの湊、そこに先輩が加わったとしても、巨大な組織である「グノーシス」を潰すことは難しい。
感情が行き急いでしまう終夜は、「ソテリア」で暴れた時から攻め入る気まんまんだった。
こういった戦力に関する分析等は終夜の十八番と言ってもいいのだが、この辺はまだ幼かった。
事情を知っている湊からしたら、仕方のないことなのかもしれないが、無駄死にしては元も子もない。
こういう時、第三者の意見が重要となる。

「ま、こっちで人集めとくから、少なくとも明日は頭を冷やすついでに休んでいなさい」

と言われて、翌日の今に至る。
本来ならいつもの訓練をするところなのだが、前回の時みたく、変な事故に合って怪我をしてしまいたくはなかった。

自分にしては心配のし過ぎかなと思わなくもないが、クールダウンさせるにはちょうどいいかもしれない。
どうも自分は一度暴れはじめたら止まらないみたいだと最近気づいた。

「しゅうや」

リビングでソファーに座りながら今日の暇つぶしの計画を練っていたところに、ピンク色のドットが入ったパジャマを着た綾音が起きてきた。

「おはよう綾音」

「うにゅ・・・おはよう・・・」

目を擦りながらまだ眠そうにしている綾音に、終夜は顔を洗ってくるように言う。

「とりあえず朝食だな」

朝は基本的に食べやすいパンにしている。
学校がある時はお手軽にしたいので、いつもパンにいろんなものをのっけるだけだ。

「しゅうや・・・お腹空いた」

「はいはい、今から準備します」

トースターで焼いたトーストの上にハム、卵、チーズを適当にのせて完成。

あとは牛乳を入れて朝食の準備完了だ。
実は綾音はもともと牛乳が苦手だったのだが、大きくなるためには必要なものだと教えたら、渋々だが毎日飲むようになった。

「いただきます」

「召し上がれ」

まだ半分寝ぼけている綾音がもぐもぐとトーストをかじる。
これはいつものことだが、上にのっている具材がお皿の上に零れ落ちる。
綾音はそれにかまわずトーストをすべて食べ終え、フォークで零れ落ちた具材を食べる。
最後に牛乳を苦悶の表情を浮かべながら一気に飲み干した。
この牛乳がいつも目覚まし代わりになる。

「しゅうや、今日暇？」

綾音の唐突な質問。
普段綾音は平日休日かまわず、一日中テレビかゲームなのだが、まだ出会って二週間。
綾音の「普段」が完全に理解できていない終夜は、他の「生活」の仕方に希望があるのだろうかとあたりをつける。

「まあ暇と言えば暇だな」

「じゃあ買い物に行きたい」

おや、と終夜は少し驚く。
買い物に行きたいとわざわざ言うからには、オシャレにでも目覚め

たのだろうか。
そういったことにあまり興味を示さない綾音が、自分から申し出たことに驚いたのだ。

「何を買いたいんだ？」

「ないしょ」

自分が一緒に行ってもいいのだろうかと考えるが、綾音が一人で買い物に行けるわけがなかったと思い改める。
なら、終夜が綾音のためにできることは一つしかなかった。

◇◇◇◇◇

「わざわざ休日に悪いな」

「いえ、私たちもちょうど今日をどう過ごすか考えていたところだったので、助かりました」

綾音といえば希。
綾音のことになると頼りっぱなしで申し訳ないなと終夜は思いつつも、結局頼ってしまっている。
希があういう性格なので、ついつい何度も頼ってしまうのだ。

「なんか綾音が何かを買いたいらしいんだけど、俺には秘密にしたいらしいから、一緒に付き合ってあげてくれる？」

場合にもよるが、終夜は秘密にしようとしていることを無理に聞き出したり、後をつけたりはしない。
だから終夜は家に残ろうかと思っていたのだが、綾音が許さなかっ

た。
どうやら心を許している希が一緒にいても、終夜がいないと不安のようだ。
だが結局終夜に何を買うのかは知られたくないらしく、希たちと合流してからすぐに別行動することに。

「分かりました。じゃあ綾音ちゃん一緒に行きましょ」

「女の子同士でのお買い物だね」

和気藹々としたムードに、すでに入っていけない終夜は、さてどう暇を潰したものかと考えながら三人の傍を離れた。
ショッピングモールのエリアから離れて一旦ベンチに座る。

「結局俺の暇は潰せなかったな」

まあ綾音が楽しめるからいいなと、おそらく明日攻め入るだろう「グノーシス」のことについて考えを巡らせる。
終夜が今までに出会った「グノーシス」の人間は下っ端だけだった。
創造に長けている人間には会ったことがない。
だから自分が彼らに敵うのかどうかが分からない。
だけど不安を今までの執念が覆う。
終夜が小学生の時、創造が少し長けているだけの普通の男の子だった。
友達とも普通に接していられる、何の変哲もない人生を歩んでいた。
争い、復讐、悲劇、憤怒・・・・・・
これらとは無縁の生活。
だが、ここに二つの誤算・・・いや、終夜にとっては思いがけない要因が用意されていた。
一つは終夜が通っていた小学校・・・中央第一小学校の秘密。

もう一つは不動という血、終夜という存在。
いや、二つ目は不幸だったのか、幸運だったのか今でも判断しにくいものだ。
根本の原因は学校。
分岐点は終夜自身。
事件の日もいつもと変わらない、何の変哲もない毎日の一部にすぎなかった・・・はずだった。
最初に聞こえたのは銃声。見えたのは銃を持ち、真っ白に染まった服を着た男たち。
その時は休み時間に入ったばかりで、今日は何して遊ぼうかと友達と相談していた。
突然の銃声と同時に子供たちの悲鳴が聞こえた。
この時終夜は女の子二人と男の子一人の計四人で固まっていた。

「ねえ、あれって拳銃の音よね」

「下のほうで爆発の音も聞こえるよ」

「こ、怖いです」

ヘアピンをつけた気の強そうな女の子とメガネをかけた男の子が、床に耳を当てて下の様子を聞き取ろうとしている。
気の弱そうな女の子は、特徴の触角のようなクセっ毛を揺らしながら傍らで耳を塞いでうずくまっている。
終夜は恐怖と同時に興奮もしていた。
つまらない日常の中の突然の変化。
幼い終夜の頭の中は期待に満ち溢れていた。

「終夜、どうする？」

「相手が武器持ちなら慎重に動かないとな」
テロ組織相手に動く気が前提の会話。
ヘアピンの女の子も同意していた。
「音は俺に任せろ。敵のだいたいの位置は把握できる」
「私は終夜のサポートをするわ。この場で一番強いのは終夜だからね」
メガネをかけた男が位置を把握して、終夜が近接で攻めながら、ヘアピンの女の子が遠距離でサポートする。
小学生にしては上出来とも言える作戦だ。
この時の終夜は神を身体全体に流して強化するしかできない。
だがそれでも小学生のレベルを超える戦闘力を持っていたから、具現化ができないという欠点を持ちながらも、この学校の中では有名人だった。

「で、あんたはどうすんのよ」

うずくまっている女の子に話しかけるが、耳を塞いでいるため聞こえていない。
希少能力（レアスキル）を持っているらしいが、この学校の生徒全員その能力を知らない。
だから多少なりとも期待していたのだが、能力以前に怖がって使い物にならなかった。
「まああの子は放っておきましょ。私たちだけで十分よ」
この時の自分を殴りたいと今の終夜が後悔しているほど、頭の悪い

会話。
まず足りないのは情報。
音で位置を把握できても完璧にではない。全体の数、動き、目的等を知らないまま、実力の薄い彼らが動くには厳しすぎる。
そして決定的に足りないのは経験だった。
今は誰もいない教室の中だから、落ち着いて最良の作戦がたてられる。
だが作戦通りにいくことなんてほとんどない。
一番重要なのは、行動中に作戦を適宜立て直すこと。
これは頭脳だけではなく経験が必須だ。

「じゃあ行くか」

まずはこのフロアの殲滅。
メガネの男の子が扉に耳をくっつけて位置と動きを終夜に伝える。

「廊下に一人いるな」

男たちが終夜たちのいる教室の入り口から、少し遠ざかった隙に扉を開けて終夜が突撃した。
男はすぐに気づくが、身体能力を極限に強化している終夜は一気に昏倒させる。
男の反応から昏倒まで約一秒。
続けて廊下の角から現れようとしているらしい男に向けて再度構えた。
角から男が顔を覗かせると同時に終夜は走り出して、一秒もかからないうちに辿り着く。
そのまま殴り掛かろうとしたが、できなかった。

「その動きで気づけるとは、どうやら動体視力も強化しているらし

いな」

男の手には銃、ではなく子供が掴まれていた。
終夜と同じ学年の生徒だ。

「な・・・なんで・・・」

動きが早すぎる。
さっきの男が反応してから昏倒させるまで一秒。
一秒で連絡ができたとは思えない。

「ガキにしては上出来だが、まだまだ詰めが甘い」

「むっ、んっ」

口を塞がれた女の子の顔は恐怖の色に染められている。
その恐怖が終夜たちにも移ったかのように体が震えはじめた。

「仲間が一人やられたのは別にかまわねえ。油断したのが悪いからな。だが、やられた理由が創造を使われたからってのがムカつくな」

男は余裕の表情で話しているが、油断はしていなかった。
終夜たちが少しでも変な動きをしたら、人質を盾にできるように。
そんな時、男の背後の角から触角が顔を覗かしていた。
教室でうずくまっていた女の子が、様子がおかしいのを察して密かに後ろに回ったようだ。
チャンスだ、と終夜は思った。
銃を持っているということは創造が下手くそだという証拠。
創造が下手なら、創造を使用する際に生じる「思念」を察知することなどできるわけがない。

後ろから音をたてないように慎重に具現化をして、何かを飛ばして当てれば勝てる。
だがそんな時、なぜか後ろで固まっていたメガネをかけた男の子が急に走り出した。

「――！！」

終夜はその男の子の名前を呼んだ。
だが男の子は止まらない。
男は人質に向けていた拳銃を男の子に向けて躊躇なく発砲した。
その弾は男の子の胸に直撃して、衝撃で後ろに吹っ飛ぶ。
メガネが砕けながら飛ばされ、血が胸から噴き出す。
その光景は終夜にとって、頭を思い切り殴られて現実に引き戻された感覚だった。

「きゃあっ」

後ろに隠れていた触角の女の子が、いつの間にか駆けつけていた男の仲間に捕まった。

「離しなさいっ」

気づいたら終夜の後ろでも気の強い女の子がもう一人の仲間に捕まっていた。
終夜たちはいつのまにか囲まれていたのだ。

「さあ、坊主はどうする？　そっちのメガネと同じ目に合うか？」

終夜の目の前で血を流し続ける友人の光景に、恐怖が体を覆った。
さっきまでの正義面していた想像はどうした。

今こそ自分がやるときではないのか。
そう頭で考えていても、体が現実の恐怖で指先一つ動かせなかった。
実際は終夜が突撃すれば三人いても勝てたかもしれない。
人質を傷つけられることなく救えたかもしれない。
でもそんなことは幼い終夜には考えもつかなかった。
動けば殺される。動かなくても結局は殺される。
自分の歩むべき道は、どちらも死へと続いていると感じざるを得なかった。

「とりあえず我々に刃向った罰として、こいつらは実験台となってもらおう」

そう言って2人の男が取り出したのは注射器。

「これは我々のムカつく上司様が創造で創りだした、有能な創造主を駄目にする薬だ。どんなふうに駄目になるかは人によって違うらしい」

その注射器を触角の子と気の強い女の子に刺した。
終夜が覚えているのはここまでだった。

「シネ」

そう一言放ったことは、うろ覚えながらも覚えている。
気づいた時には、学校にいたテロリストたちを皆殺しにしていた。
どの死体も体に穴が空いていたらしい。
拳銃の弾よりも大きい穴が。

◇　◇　◇　◇　◇

「しゅうや」

綾音の声が聞こえる。
目の前が暗い。
だけど不思議と綾音の声はきれいに頭の中に響いていた。

「どうやら寝ちゃったみたいだな」

ベンチに座りながら「グノーシス」について考えている間に寝てしまったらしい。

「しゅうや、汗かいてる」

綾音は自分のポケットからハンカチを取り出して終夜の汗を拭いた。

「不動さん、お買い物は終わりましたよ」

気づけば夕方。
ずいぶんと長い間寝ていたらしい。
昨日のことがけっこうキていたのか。それともこれからことを考えているうちに心労が自然と溜まっていたのか。

「はい」

終夜の汗を拭き終えた綾音が、紙袋を終夜に手渡した。
中を開けてみると小さな箱が一つ。

「・・・これはどういう意味かな」

箱の中には小さな指輪。

ちょっと高級な玩具といった見た目の、金属でできたシンプルな指輪だった。

「テレビで好きな人には指輪をあげるって言ってた」

「私たちもきちんと説明したのですが、指輪にするってきかなくて」

希が真剣に説明しても、テレビの言葉を鵜呑みにしすぎた綾音には意味を成さなかったのだろう。

「日ごろ優しくしてもらっている不動君に、何かプレゼントをしたかったんだよ」

「そうか・・・・・・ありがとう綾音」

終夜はいつものように綾音の頭を撫でてお礼を言った。

「早くつけて」

指輪をはめろと急かす綾音に、ゆっくりと指輪を手に取って左手の中指にはめる。

「どの指にはめてもいいの？」

終夜が指輪をはめる様子をジッと見てた綾音がそんなことを言い出した。

「いいの。さ、そろそろ帰ろうか」

嘘は言っていない・・・が、綾音の言わんとしていることは分かっ

ている。
それを綾音が口に出す前に終夜は早口で帰ることを促したのだった。

第十三話　サルキコス

「授業に出なさい」

「・・・・・・分かりました」

内心攻める気満々で学校に登校した終夜に、カガリが告げたことは終夜の意に反することだった。
一昨日までの終夜ならここで猛反発していたところだろう。
だが今の終夜は冷静だった。
理由はよく分かっていない。
あの夢を見たからか、綾音の行動のおかげなのか。
どちらにしても、今の終夜の頭は冷静と同時にとても冴えてもいた。

「あら、てっきり文句を言うものだと思っていたのだけど」

「文句を言ったほうがよかったんですか？」

「そうね。結果が違ったかもしれないわよ」

「そうですか。とりあえず俺が必要になったら呼んでください。内心は早く終わらせたくてしょうがないんですから」

カガリの挑発的な物言いに、終夜は軽く流してさっさと退出した。
自分でもものすごく冷静だったと思っている。
終夜の精神は気まぐれなところがあった。
頭が悪いのではないかと思うほど考えが回らなかったり、天才なんじゃないかと周りが評価するほど頭の回転が早いときがある。
今日は昨日のおかげで幾分冷静であり、頭の回転も悪くない。

そして同時に直感も悪くはなかった。

「どうだった？」

教室に戻った終夜に声をかけたのは湊。
周りに聞こえないようにこっそりと終夜に先ほどのことを聞いてくる。

「授業受けてろってさ」

「まあ予想通りだな」

「あれは俺たち抜きで何とかする気だな」

「それも・・・まあ予想通りだな」

「情報を持ってきたのは俺たちだ。俺たちに情報収集させたところから見て、最初から俺たちを外すつもりだったとは考えにくい。俺たちに関わらせたくない『何か』が浮上したんだろう」

思い当たる点はたくさんある。
だがそれはおそらく最初から分かっていたことのはずだった。
となるとおそらく終夜の知らない『何か』があると見ていい。
カガリもこちらの動向は注意しているはずだから、下手に動くことはできない。
様子を見る必要があった。

「はーい。HR（ホームルーム）を始めるよー」

2人は水城先生の登場で、一旦話を打ち切る。

いつものようにＨＲは長引いたが、二週間も経てばさすがに誰も気にならなくなる。
次の授業の先生も、今では涼しい顔で教室に入ってきている。
慣れというのは恐ろしいものだと改めて感じたのであった。

「俺は今日購買で買うから先食べててくれ」
「そのぐらいなら私たちも待ってますよ」
「もし混んでたら遅くなるし、先に食べてていいよ」

終夜は軽く湊に目配せしてから早足に教室を出る。
目的は購買、ではなくお助け部室だ。

「いないな」

予想通りの結果。
大河からそれとなく聞いた情報によると、カガリが出かけたとのこと。
目的は殲滅か、さらなる情報収集か。
どちらにしろ、カガリの根城が空っぽなのは都合がいい。
終夜は静かに部室に入り、扉を閉める。
カガリが普段座っている机に近づいて、引き出しを手当たり次第に捜索した。
引き出しの中は大量の紙でいっぱいだった。
どれもなんらかの資料ととれるが、終夜はその資料に妙な違和感を感じた。
内容に統一性がないどころか、白紙の紙すら混ざっている。
明らかにダミーだった。
終夜は資料をパラパラと捲って、一枚一枚を確認する。

紙を捲るスピードは尋常ではない。
だが終夜は一枚と見逃すことなく、内容を確認していく。
やがて一枚の資料に目を付けた。

「これは・・・」

そこには『ディス・グノーシス薬について』と書かれていた。
タイトルは読めたが、内容はぐちゃぐちゃしていて読むことができない。
ディス・グノーシスとは、グノーシスの反対。
積極的に叡智を欠くことを意味する。
そこまでは終夜は知っていた。
だが、それに薬があるというのは聞いたことがない。

「これはもしかして・・・」

頭の中で一つの推測が浮かび上がる。
自分の過去に起きた出来事と、この名称の意味するところを考えると、むしろそれ以外考え付かなかった。

「とりあえずここにはこれ以上有益な情報はなさそうだな」

得られた情報はたった一つの薬品名。
求めていた情報ではないものの、終夜にとって十分有益だったと言える。
誰かが来る前に、さっさと教室へ戻ろうと思ったところで異変が起きた。

◇　◇　◇　◇　◇

耳に入るのは鳴り響く銃声と爆音、わずかに人の足音も聞こえている。
終夜が購買に向かってから10分経ったころ、鷹左右学園の平穏を破るように銃声と爆音が鳴り響いた。
Eクラスの中で一番に反応したのは湊。
続いて大河も頬張っていた食べ物を飲み込んでポケットの中のビー玉を握った。
そこで希が一番に考えたのは終夜のこと。
Eクラスは二階にあるが、終夜が向かった購買は一階にある。
何者かが侵入したとしたら鉢合わせする可能性が高い。
希は自分の身よりも、終夜のことが頭から離れなかった。
そして湊は違う意味で終夜を心配していた。
このタイミングでこの学園を攻めてくるのは、一つしかない。
当然終夜も同じことを考えるはず。
そして相手が終夜の情報を持ち合わせていてもおかしくない。
そもそも収束部がいないとはいえ、この学園に攻め入る時点でそれなりの覚悟と力があると見ていい。
終夜の殺人衝動が起こる可能性は決して低くはなかった。

「このままジッとしているわけにもいかない。俺は少し様子を見てくるから、大河はこの階の生徒をこの教室に集めて、防衛に徹してくれ」

AクラスとBクラスが集まって防衛に徹すればたいていの敵は凌げると考えていい。
このクラスは10人ほどしかいないが、教室自体はそれなりに広い。
さらに教室と教室の壁は、こういう緊急時に取り除ける仕掛けになっている。
敵の目的は不明だが、分からないからこそとりあえずでも防御に徹する必要がある。

「分かった。お前が心配するのは分かるが、気をつけろよ」

「ボクも手伝うよ。いつ侵入者がこの階に来てもおかしくないから」

湊は頷いて教室を出た。
大河と望もそのあとを追うように教室を出る。
教室に残ったメンバーは皆自分の創造に自信がない者。
皆が何もできない自分を歯痒く思いながらじっと身をひそめることにした中、希だけは違っていた。
希も意を決して教室を出る。
大河と望が出てから決断するまで、そう長くはかからなかった。

「C班はここで待機。D班は俺に続け」

武装した真っ白な服装男たちが一階の廊下に密集している。
上に上がる気配はない。

「（まだ購買にいるといいのですが）」

希は白服の男たちの目を盗みながら購買へと向かった。

一方終夜はお助け部室を出たところで白服と鉢合わせ。
相手よりも早く気づいて昏倒させた。
購買とお助け部はかなり離れている。
だが終夜はお助け部から購買へ向かっていた。
何か目的があるわけではない。
何かに引き寄せられるように走り出していた。

「妙だ・・・」

思わずつぶやかずにはいられない。
昔と同じ、武装した白服の男たち。
あの時と何も変わっていない。
何も進歩していなかった。
ここを狙ったということは十中八九終夜が狙いのはず。
それなのに一切対策が練られていなかった。

「となるとこれはおそらく」

陽動。
10人ほど昏倒させたところで購買がある部屋の扉が見えた。
中の様子を確認すると、白衣の男が一人いるだけ。
終夜は一気に攻め入ることなく、静かに扉を開けて部屋に入った。

「ようこそ、不動終夜君。なかなか早かったじゃないか」

メガネをかけた、いかにもマッドサイエンティストですと言わんばかりの風貌の男が手を広げて終夜を歓迎する素振りを見せる。

「お前が『グノーシス』の首謀者か？」

白衣の男が「グノーシス」をまとめている人間だとしたら、相当な実力者ということになる。

「首謀者？それは少し違うな。まあ君からしたら首謀者かもしれないがね。私はアイオーン・プレローマ」

「なるほど。俺の捜していた人物で間違いないようだな・・・・・・

それと部屋の外に五人、窓の外で待機しているやつがいるな」
「ほほう」
「お前たちの戦略は分かっている。俺に二度同じ戦略は通用しない」
「まあ確かに我々の本質は実践ではないからな。戦略に関しての進歩がないということは認めよう。しかしよく分かったね」
「昔は分からなかったさ。だが成長した今なら、あの程度の戦略は簡単に見抜ける」

終夜が小学生のころに学んだこと。
それは人の気配だった。
あの時の敵の動きは迅速過ぎた。
一人一人の連携がすごかったのではなく、司令塔が遠くから指示していたのだ。
おそらくその司令塔は創造に長けた人間。
校舎内の人間すべての動きを把握できる人間だったことになる。
終夜たちは見事にその戦略にハマり、気づいた時には囲まれていた。
「俺はあれから神(しん)の扱いの練習をして、武術を学んだ」
「進歩してこそ人間だ」
まるで自慢をするなと言わんばかりの言いぐさ。
「創造もその一部ではないのか？」
「否定はしないよ。だがもっと上があるのではないかね」

言っている意味が分からなかった。
まるで創造を容認しているかのようなセリフだ。

「お前たちの狙いはなんだ？」

「強いて言えば、可能性の発見、模索だな。こちらも問おう。君はなぜ強くなろうと思った？」

愚問だった。
その質問の答えは一つしかない。

「同じ過ちを繰り返さないためだ」

「ほう。過ちとはどれのことを言っているんだ？仲間を守れなかったことかね？違うだろ。君の心の奥底で恐怖しているのは仲間を守れないことじゃあない。自分の本性を知られてしまうことじゃないかね。いや、自分の本性それ自体と言うべきか」

「っ！？」

小学生の時にテロ組織に刃向った終夜たちは、見事に返り討ちにあったと言ってもいい。
仲間のうち一人は拳銃で撃たれ、2人は訳の分からない薬を投与された。
結果的に終夜が全滅させたとはいえ、終夜にとって被害は大きかった。
だから当然自分が強くなろうと努力した理由は仲間を守るため、そう思っていた。

「『不動』・・・なかなか興味深い家系だ。君の殺人衝動とやらはなんともすばらしい」

「・・・否定はできない。だが、お前には関係のないことだ」

大河たちに自分の本性を伝えた今、その辺の恐怖があるかどうか判断しにくい。
幼い時だけの無意識に感じていたことかもしれない。
それでも終夜は創造格闘技模擬戦の時、自分が衝動を起こしてしまったと気づいた時、不安があったのは間違いない。
だがどうであろうと、この男に言われる道理はないし、結果悪いことではない。

「まあいい。ところで君自身、殺人衝動とは別に何か不思議だと思うことはないかね？」

「どういう意味だ？」

「私が調べたところ、君は非常に頭がいいようだ。身体能力強化が幼少の時からできるところからも見て、創造の才能も十分にある。それなのになぜ自分は具現化ができないのか、不思議に思ったことはないかね」

「それは媒体が・・・」

媒体が間違っているから、そう言おうとしたが、アイオーンはその言葉を手で遮る。

「それは関係ないことだよ。私は科学者だ。もちろん創造についての研究も携わっている。媒体とは自分の想像の世界を確立するもの。

そしてその想像には当然身体能力強化も含まれる。君は頭がいいのだから、その辺のことには気づいているはずだ」

身体能力強化ができるということは、創造が問題なくできるということ。

創造ができるということは、具現化もできるということになる。

本来なら、創造↓具現化↓神の制御と熟練していくもの。

具現化の過程を飛ばして神の制御ができるわけがない。

当然、終夜はそのことには気づいていた。

しかし、不確定媒体のように、まだ自分の知らない未知の症状に陥っているという可能性もないわけではない。

「君の過去はなかなかおもしろい。あの事件の後、運のいいことに卒業式が間近だったため、すぐに環境を変えることができた。そして中学のころ、入学当時は荒れていたものの、月城湊に出会い変わっていく。それからまた君にとって人生を左右する出来事が発生した」

「よく調べているな。それがどうした？」

「いやいや、君の不幸遭遇率、不幸な才能、どれもすべて偶然の出来事だと思っているのだろうかと思ってね」

生まれつき不幸な人間はいる。

終夜の不幸具合は少し特殊とはいえ、別段おかしいことではないと思っている。

そもそも生まれが『不動』なのだ。

もともとテロ組織が小学校に来たのは終夜とは関係のない要因。

『不動』という家系に生まれたのは全くの偶然。

それでも父は克服できたと言っている分、先が暗いわけではないし、

そもそもこの血がなければ小学生の時、自分は死んでいたかもしれなかった。
パッと考えた感じ、不幸に思えなくもないが、全体で考えると幸福と不幸が絶妙なバランスで成り立っていることが分かる。
「それこそが君の不幸なのだよ」
「お前の話にこれ以上付き合うつもりはない。単刀直入に聞く。『ディス・グノーシス』とはなんだ？」
「ほう、その薬に近づいたか。確かにそれは君が推測している通り、昔君の友人に投与した薬だよ」
「当然解毒薬はあるんだろうな？」
「ないよ」
「なっ、ふざけんな！」
「落ち着きたまえ。もともと『ディス・グノーシス』は偶然できた代物なのだ。我々の目的には反する薬なのだが、下の者にはちょうどいいと思ってね」
「グノーシス」が神に近づくことだと考えると、「ディス・グノーシス」とは神から離れること。
だがテロ組織「グノーシス」にいる創造を嫌う者からすると、「ディス・グノーシス」で人間が神から離れることがそのまま神に近づくことになる。
「まあ解毒薬がないのは本当だが、作ろうと思えば作れなくもない。

『ディス・グノーシス』は私が創造と科学で作りだした。解毒薬を作るぐらい造作もないことだ」

「素直に作るわけはないんだよな？」

「タダではやれないが、条件によっては作ってやってもいい。なに、簡単だ。君が我々の仲間になればいい」

「お前らの目的が分からないのでは考えようがない」

「できるだけ情報を得ようだなんて考えては駄目だよ。君がきちんと我々の仲間になれば好きなだけ情報を教えよう。もともと君にはその権利がある」

「権利だと？」

「そうだ。我々が君を欲するにはきちんとした理由がある。おそらく君も我々に賛同してくれるはずだ」

アイオーンは若干ふざけた口調ながらも、嘘を言っている様子ではない。

かと言って、自分の人生を変えた組織に入るつもりは毛頭なかった。

「お断りだ」

「薬を諦めると言うのかね」

「選択肢はもう一つある・・・・・・お前を倒した後、製造方法を聞けばいい」

「私は争い事が苦手なんだがね」
肩をすくめる白衣の男に向かって、終夜は走り出した。
男は何の反応も見せない。
そのまま近づいて殴り掛かろうと思ったところに、終夜とアイオーンの間に大柄な男が割り込んだ。
勢いを中断して後ろに下がるには、隙を見せてしまう絶妙なタイミング。
仕方なくそのまま右ストレートを腹にかました。

「なっ！」

単純な右ストレートだが、その右手には膨大な神（しん）が溜められていた。
対してその一撃をなんとも感じていない大柄な男の腹には、たいして神が込められていなかった。

「があっ」

大柄な男は終夜の右手を掴んで地面に叩きつけて投げ飛ばした。

「くっ・・・脂肪が固い。人間の脂肪とは思えない」
「その通り。こいつは私の作品だよ。サルキコスという。君のために特別に用意した」
「サルキコス・・・肉体人間か。ならこれでどうだっ」
終夜はサルキコスに再度近づいて手を手刀の形に変える。
そのまま、男の喉に突き刺した。
もちろん指先には膨大な神が込められている。

「グオウッ」

終夜の攻撃にまったく効いた様子のない男が終夜を蹴り飛ばす。

「ふむ。話にならないか。では、ここでちょっとした刺激を投与してみようか」

アイオーンがパチンッと指を鳴らすと、武装した白服の男が近づく。その手には綾音が掴まれていた。

「しゅうや」

「綾音・・・」

「彼女はすばらしいよ。君も感じただろ。彼女の第六感のすばらしさを」

「・・・・・・」

「彼女の第六感は君にしか適用されない。君の不幸に反応するようだ。だが今回は綾音君自身が理由で不動君が不幸になってしまうようだねえ」

どうやら綾音は、終夜の身に何かが起きると感じてこの学院に向かおうとしたところを捕まったらしい。

「君が後5分以内に倒さなければ、綾音君が不幸な目に合うぞ」

「くっ・・・」

終夜は焦りから怒涛の攻めを繰り出す。
首が無理なら股間、目つぶしと次々と急所を攻めるが、どれも固いものに阻まれる。
股間の部分には何かを仕込んでいるようで、目つぶしをしようとすると、男は目を瞑り瞼で防御する。
瞼まで固いのだ。

「瞼まで強固にすることはできたんだがね。どうも股間だけはどんなに頑張っても脆くて仕方がないんだ。だからそこだけ特注のプロテクターを仕込ませてもらった」

「くそっ」

ひじ打ち、膝、絞め技、どれを使っても効果がない。

「あと5秒だ。4、3、2、1・・・」

0、とアイオーンは言う・・・・・ことができなかった。

「不動さん！」

第十四話　再起

「不動さん！」

「希・・・」

購買部へ駆け込んだのは希だった。
一人で駆け込んだのではなく、武装した男に捕まっている状態だ。

「これはこれはいいところに。おい」

アイオーンの言葉に反応したサルキコスが、終夜を放り投げて希に近づく。
速度はそんなになく、ドスンドスンと音をたてて進むが、捕まっている希はなす術がない。
サルキコスに恐怖しているのか、武装した男は希をサルキコスに向けて放り投げ、早々に退出した。

「さて、約束の時間は過ぎているな。綾音君でもそこのお嬢さんでも構わないが、どうする？」

アイオーンは終夜にこのままおとなしく仲間になるか否かを求めている。
もちろん仲間になる気なんてないが、断った時点で2人は・・・・・・

「迷っているようだね。ならとりあえずお嬢さんにはご退場願おうか」

「待ってくれ！」

「おや、仲間になるかい？」

終夜に残されている答えは一つしかなかった。

「ああ。仲間・・・に、なる・・・」

承諾の言葉を発するしかない終夜。
だがそんな終夜の様子を見て、アイオーンの目は憐みの目に変わる。

「嘘はやめたまえよ。なんともつまらないな・・・・・・そっちは始末しろ」

無情にも響く命令。
サルキコスは希の首を掴んでもう片方の手を振り上げた。

「あっ・・・・・・ま、待て」

その時、綾音が掴んでいた男の腕に噛みついて拘束から抜け出した。

「希を離して」

そのままサルキコスに体当たりをかます。
だがサルキコスがよろめくわけもなく、反動で綾音が倒れる。
サルキコスは投げやりな感じで、希を綾音に向けて放り込んだ。

「きゃっ」

「綾音！希！」

「もう2人とも始末してしまってかまわないよ。不動君も最悪研究材料として保存するとしよう」

この言葉が、この時終夜が聞いた最後の言葉だった。

急激に終夜の意識が遠のく。

「シネ」

アイオーンの死の宣告と同時に不動の血の殺人衝動が発動した。

指を鳴らしてサルキコスに“何か”を飛ばす。

それでもサルキコスはよろめきすらしない。

終夜はもう片方の手を加えて同時に指を鳴らす。

今度はさすがによろめいた。だがダメージが通った様子ではない。

「オオオオオオオオオオッ！」

サルキコスはまるで猛獣のように、咆哮を上げて終夜に突撃する。

その様子を見ても終夜は焦る様子も怖がる様子も見せない。

終夜は無表情に、冷酷に、指先に神(しん)を溜める。

「オオオオオオオオオオッ！」

「キエロ」

終夜は再度指を鳴らした。

「グオッ」

サルキコスは片膝をつくが、痛みで動けなくなったわけではなかっ

た。
その状態でサルキコスは腕を地面に叩きつける。
それによって生じた衝撃に対して、終夜は指を鳴らして対処しようとしたが、威力が足りない。
結果、終夜は弾き飛ばされた。
それでも終夜は相手を叩き潰すべく、起き上がろうとする。
だが、相手のほうが少し行動が早かった。
サルキコスは終夜に馬乗りになって、拳を終夜の腹めがけて振り下ろした。

「がはっ」

意識が飛びそうになるのを懸命に堪える。
強い衝撃と同時に終夜の殺人衝動は消えていた。
どうやら大きな衝撃を受けると、殺人衝動の継続が難しくなるようだ。
今までこんなことがなかったため、終夜もこの事実には、意識を懸命に保ちながらも驚いていた。

「ふむ。どうやら不動の血は冷めてしまったようだね。それにしても覚醒してこの程度か。ハズレ、かもしれんな」

「くっ・・・お前は・・・俺に何を求めている？不動の血・・・以外にも何か・・・あるというのか？」

呼吸がままならない状態で、終夜はなんとか体を起こしながらも問いかける。
その様子がよほどアイオーンからしたら哀れに見えたのか、冷酷に終夜を見下ろしていた。
その眼からは、先ほどまでの興奮や興味といった感情が見られない。

「いちいちハズレに説明するつもりはないよ。疲れるだろ」

終夜の身体にはまだ十分と言える神が残されている。
だが、馬乗りになっているサルキコスを弾き飛ばしてなお、アイオーンを攻撃するほどの体力は残されていない。
頼みの綱である魔法使い級等の実力者も、各学年の防御体制から外れることはできないだろう。

「だが・・・ふむ。面白いことを思いついたぞ。私は寛大だからね。君たちはこのまま生かしておいてあげよう。それに君たちを始末して連れていくには少々時間が足りないようだ」

アイオーンは耳に手を当てながらそんなことを言う。
司令塔と連絡をとっているのだろう。
時間がないということは、誰かがここに向かっているということなのか。
それもアイオーンが退くことを選ぶほどの実力者が。

「これは君にチャンスを与えているのだよ。とりあえず綾音君の身は私のほうで預かろう。なに、安心したまえ。明日の正午までは身の安全を保障しよう。サルキコス、連れてきたまえ」

アイオーンの命で、サルキコスは終夜の元から離れて綾音の胴を掴んだ。

「しゅうや・・・」

「くっ、綾音を・・・はな、せ」

「そんな状態で何を言っているのだか。明日の正午までしか猶予はやれんぞ。ちゃんと君一人で来たまえよ」

「くそっ・・・」

アイオーンが終夜を背に退却しようとする。
終夜の耳には、新たな足音が聞こえていた。
それでも、もう、間に合わない。

「終夜！」

アイオーンたちが姿を消すと同時に、購買部へ2人の足音が入り込む。
一人は聞きなれた声、湊だった。

「俺は・・・かまわない。希を見て・・・やってくれ」

「こちらは大丈夫だ。特に目立った外傷はない。それより君のほうが重症だぞ」

もう一人は女性の声。
凛とした声だった。
終夜は希の状態が問題ないと聞いて安心したのか、そのまま眠りに落ちた。

◇◇◇◇

『なんとも弱い宿主だな』

誰だ？

『我が名はソフィア』

ソフィア？
智と言う意味だな。

『さすがに博識だな。お主はなぜそんなに博識なのか考えたことはないか？』

・・・・・

『お主は勉学に勤しんだわけではない。その事実には気づいておるはずだ』

薄々感じてはいた。
自分は普通の人とは違う。
何か別の力を秘めているのではないか、と。
知識だって自然と頭の中から湧いてくる。
知っているのが当たり前だとでも言うように。
その力の正体に心当たりはあった。
だけど、いくつもの矛盾点が存在したから、すぐに切り捨てていた。

『矛盾点とな。それは弱いことか？』

そうだな。
一番の理由は俺が具現化できないことだ。
それ以外にもその存在そのものに対して疑問が多い。
もし俺が“それ”だとして、なぜ“それ”についての知識がないのか。

『そこまで考えが及んでいるのなら十分。お主が弱い原因は、お主の血だ。我もそれにはほとほと困っておる』

・・・また血か。

不動というのはそんなにすごいものなのか？

『たいそうなものなのは間違いない。しかし、根本の原因は血だが、それを強調させておるのはお主自身だ』

それは・・・分かっている。

『いいや、分かっておらん。だがまあよい。我は未来が視えるわけではないが、それもいずれなんとかしてゆくだろう。それよりも主が今やらねばならんことはなんだ？』

言われるまでもない。

『ならさっさと起きよ』

「終夜、起きたか」

「・・・湊か」

終夜が寝ている横で湊が座っている。
白い壁に白いカーテン。
どうやらここは保健室のようだ。

「不動さん、ごめんなさい・・・」

湊の傍らで立っていた希が突然謝る。

自分が考えなしに乱入したから綾音が連れ去られたと、責任を感じているのだろうが、それ以前に終夜の力が及ばなかったのが原因。

むしろ、希の乱入がなかったら湊たちが間に合わず、終夜は殺されていたかもしれなかったのだ。

「謝ることはないよ。俺の力不足が原因だ。冷静さも足りなかった」

「そんなことっ・・・」

希がそれでも何かを言おうとするが、終夜は首を横に振る。

「取り込み中のところ申し訳ないが、こちらも不動終夜に用がある」

凛とした声で言うのは、片側にだけ紫のリボンをつけた女性。

なぜか帯刀している。

先ほど湊と購買部へ駆け込んだ人だった。

「私は収束部に所属している、柊刀華（ひいらぎとうか）だ。今回は収束部員が不在だったとはいえ、すまなかった。私だけは遠征に行かなかったのだが、外で事件が起きていたためそちらの方に行っていたからこちらに来るのが遅れてしまった」

「謝るのはむしろ俺のほうです。今回の騒動の原因は俺だったみたいですから」

「そうらしいな。武装したやつらも一階だけで、クラスまでは押しかけていなかったようだ」

「やつらのアジトの場所は分かりますか？」

「・・・話は小鳥遊希から聞いた。人質がいる以上強行突破は避けたいところだが、君にその場所を告げることはできない」

「なぜですか！」

「再び敵と対峙して勝ち目はあるのか？いや、生き残れる可能性はあるのか？」

痛いところを突かれる。

終夜の攻撃が一切通じなかった相手に、ろくな対策もできないまま向かっても意味がない。

「それにその状態では歩くことすら難しいはずだ。おとなしく私にまかせておけ」

「私たち、ではなく、私ですか」

「何が言いたい」

「どうやら収束部員は先輩一人のようですね。他の生徒を同行できるとしてもせいぜい一人のはずです。たとえ魔法使い級でも一般人に収束部の仕事をさせることはできませんから。それに情報もなしに行ったら、先輩たちは無傷で行けても綾音は無傷では済みません」

「その状態の君を連れていけるほどの情報を持っていると？」

「はい」

「・・・明日、出発前に君の様子を見にまた来る」

刀華はそれだけ言って、保健室から退出した。

「どうやら俺の情報はたいした重要性を持たないと思われているみたいだね」

一日の猶予があるというのに、情報を聞こうとしない。
その情報によって作戦が立てられるかもしれないというのにだ。
これは、どちらにしろ自分たちの力があれば余裕だと言っているのと変わりない。
明日終夜の様子を見に来るかどうかも疑わしい。

「はあ〜い」

刀華が退出して一分ほどの間隔でカガリが入室してきた。

「外で柊君たちが待っているから、あなたも一緒に帰りなさい」

一人ではなく、安全のため複数人数で帰れということだろう。
笑顔のわりに有無を言わさない口調。
ここからの会話に希は邪魔だということになる。

「・・・はい。では不動さん、お大事に」

自分が役立たずだと思い込んでいた希は、素直にカガリの指示に従った。

「柊先輩から俺から情報を聞き出せとでも言われたのですか？」

「あら、なんでそう思うのかしら？」
「扉の前で人がどう動いているかぐらい分かります。先輩が退出したところにちょうどカガリ先輩が現れ、すれ違わずに止まっていましたから。さすがに内容までは聞こえませんが」
「ま、私は収束部員じゃないから終夜君がどこへ行こうと止める権利はないわ。でも刀華も言ってたと思うけど、行ったとして勝てるのかしら」
「勝てる勝てないの問題ではありません。このまま行かずに綾音が殺されてしまうのは、俺が死ぬのと同義です。せめて死ぬのならやれるだけやって死にます」
「綾音ちゃんとは最近の付き合いだって聞いたけど」
「希たちと知り合ったのも最近です。捕まっているのが綾音じゃなくても同じことをします」
「強情ねえ。ま、どのみち終夜君にはアジトの場所を知られちゃってるから意味ないのかもしれないけど。安心して、刀華はそのこと知らないわ」
刀華にすべて情報が渡っているわけではないというのは先ほど確証を得ていた。
終夜は自分がアジトの場所を知っているのにもかかわらず、刀華にアジトの場所を聞いた。
それに対して刀華は教えられないと答えた。
さらに情報の提示まで出して、刀華に揺さぶりをかけてみたのだ。

「終夜君も気づいているでしょうけど、さっきまで私はあなたたちが得た情報が正しいかどうかの確認に行ってたわ」

「それでどうでしたか？」

聞いたのは湊。

終夜はただ黙ってカガリを見つめる。

「嘘ではなかったわ。思ったより警備もたいしたことない。あなたたちなら奥まで辿り着くこと自体は難しくないでしょうね」

おそらくそこは複数あるアジトのうちの一つ。

アイオーン専用の研究所と言うのはあながち間違いでもないだろう。

制圧されてもやつらからしたらたいして痛手ではないのかもしれない。

「ちなみに私は行かないわよ。もし終夜君に加担したら、あとで刀華に何されるか分かったものじゃないから」

「いや、ここまで引き合わせたのってカガリ先輩ですよね。今さらな気がしますが・・・」

「あら、月城君は私がいないと不安で不安で仕方ないのかしら？それに、そのことについて私はそうだと認めてなんていませーん」

「・・・・・・」

「まあいいよ。もともと俺一人で行くつもりで、ついでに湊を連れていこうか迷っていたぐらいですから」

「そんな身体のやつに言われてもな」

「あなたたちって本当にいい関係ね。私と刀華もそんなんならよかったんだけど」

性格は別にしても、立場の違い等の問題があるのだろうか。
カガリは一瞬遠い目をして軽くため息をついた。

「ま、あなたたちならあそこの攻略は大丈夫。あとは終夜君がボスを倒せれば問題なし」

「ボスの攻略はどうなんだ？」

「・・・一つ試したいことがある」

「ＯＫ。詳しい作戦を立てよう」

「あら、そんなんで信用していいの？」

「終夜が試したいと言うのなら、それは意味があることです。俺がとやかく言うことではありません」

「そう。ならもう私から何も言うことはないわ。こっちは刀華の突入を少しでも遅らせられるように頑張ってみるから」

「お願いします」

お互いの確認を得て、終夜は最後の戦いへと挑む。

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6951y/

想像が創造を具現化させる

2011年12月24日11時47分発行